# 昭和62年度 発掘調查報告書

柏木遺跡新田遺跡(後地区)新田遺跡(西地区)山王遺跡

昭和63年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市は、広域仙台圏の中核的都市として、「文化のかおるうるおいのあるまち」を基本 目標に長期的ビジョンにたったまちづくりを押し進めています。その一環として、新しい文化 の創造と伝統の継承・発展を目指し、多賀城市文化センターが昭和62年4月に開館いたしまし た。同時に、この文化センターの中に埋蔵文化財調査センターが設置され、市内の遺跡の発掘 調査や資料の収集・保存・公開、さらに文化財愛護精神の普及・啓発活動などを積極的に行う ことになりました。

本報告書は、当センターが昭和62年度国庫補助事業として調査を実施した柏木遺跡、新田遺跡、山王遺跡の成果を概略的にまとめたものです。特に柏木遺跡では、約10万年前に遡るとみられる旧石器時代前・中期の石器が多量に発見され、また奈良時代に国府多賀城に鉄を供給していたと思われる製鉄遺構が発見されました。後者では製鉄炉、木炭窯、鍛治工房跡などの遺構がセットとなって良好な保存状態で残されていました。この時期の製鉄遺跡は、東北地方ではわずかに福島県で発見例があるだけで、宮城県内では他に例をみません。さらに、国府多賀城に関連する官営的な性格を有していたとも考えられ、学術的にも大変貴重な遺跡であるといえます。

なお、柏木遺跡の発掘調査におきましては、文化庁、県文化財保護課、東北歴史資料館、多 質城跡調査研究所、東北福祉大学の芹沢長介先生、東北大学の須藤隆先生をはじめ考古学研究 室の方々、多くの学生や地元のみなさんの御協力を得、特に本市文化財保護委員の鎌田俊昭氏 には調査員として多大の御協力をいただきました。ここに関係者の皆様に対し厚く感謝申しあ げるとともに、本報告書が広く教育の場や学術研究のために役立つことを願うものであります。

昭和63年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所 長 名 取 恒 郎

## 例 言

- 1. 本書は、昭和62年度の国庫補助事業として実施した柏木遺跡、新田遺跡(後地区)、新田 遺跡(西地区)、山王遺跡の調査成果をまとめたものである。
- 2. 本書の執筆・編集は、各調査の担当者が分担して下記のとおり行った。なお、柏木遺跡B 地区の旧石器関係については、多賀城市文化財保護委員鎌田俊昭氏に御願いした。

【 - 4(Ⅰ) ····· 鎌田俊昭

Ⅱ ---------- 千葉孝弥

I-1~3·4(II) --- 石川俊英 相沢清利 Ⅲ·VI ------ 石本 敬

- 3. 柏木遺跡の石器観察は、鎌田俊昭、山田晃弘(東北歴史資料館)、山田しょう(東北大学 大学院)の協議のもとに、森嶋秀一(東北大学大学院)が実測・トレースを行った。
- 4. 炉材粘土の耐火度測定については、川鉄テクノリサーチ株式会社、総括技術室に依頼した。
- 5. 石材の鑑定は、蟹沢聡氏(東北大学)に依頼した。
- 6. 本書の土色については、『新版標準土色帖』(小山正忠、竹原秀雄:1976)を使用した。
- 7. 調査、整理に関する諸記録および出土遺物は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが一括保 存している。

## 調查体制

調査体制は次のとおりである。

○多賀城市教育委員会 社会教育課文化財保護係(宮城県多賀城市中央2丁目27番1号)

社会教育課長 名取恒郎 技師 滝口 卓

文化財保護係長 高倉敏明 主 事 柏原靖史

○多賀城市埋蔵文化財調査センター(宮城県多賀城市中央2丁目27番1号)

所 長 名取恒郎 (兼務) 技 師 石川俊英 千葉孝弥 石本 敬 相沢清利

主 査 高倉敏明( / ) 嘱 託 鈴木久夫 滝川ちかこ

## 調查要項

#### <柏木遺跡>

1. 遺跡所在地:宮城県多賀城市大代5丁目1番1号他

2. 調査期間 :昭和62年8月17日~昭和63年3月31日

3. 調査面積 : 4,000m (対象面積12,000m)

- 4. 調査員:鎌田俊昭、藤村新一、横山裕平(石器文化談話会) 山田しょう、森嶋秀一、桜 井美枝(東北大学大学院)
- 5. 調査参加者: 菊池豊、熊谷信一、芳賀英実 横地剛、加藤勝仁、風間栄一、辻史郎、飯 坂正弘、西山伸一(早稲田大学)、木村有紀、亀田直美(早稲田大学大学院)、下平博行、伊藤慎二(国学院大学)、野中修二、栗原伸好、酒井直樹(帝京大学)、新野一浩、千田祐 美恵(東北福祉大学) 他、多賀城市大代・笠神地区、七ケ浜町のみなさん72名
- 6. 遺物整理: 佐藤悦子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子
- 7. 調查協力:文化庁、宮城県教育庁文化財保護課、東北歷史資料館、宮城県多賀城 跡調查研究所、仙台市教育委員会文化財課、東北大学文学部考古学研究室、石器文化談話会、大和団地株式会社、丸信建設株式会社
- 8. 発掘調査から報告書作成まで下記の諸氏、諸機関から御教示、御協力いただいた。

芹沢長介(東北福祉大学教授)、須藤隆(東北大学文学部助教授)、中川久夫(東北大学理学部教授)、焓崎彰一(名古屋大学教授)、岡田廣吉(東北大学助教授)、小林達雄(国学院大学教授)、木村英明(札幌大学教授)、柳田俊雄(郡山女子短大助教授)、山田一郎(東北大学農学部)、松村恵司、佐藤信(文化庁)、葉賀七三男(日本産業技術史学会)、志村宗昭(金属材料研究室)、穴澤義功、大澤正己(たたら研究会)、石田琢二(仙台二高)、佐瀬隆(盛岡四高)、鴇田勝彦(古川工業)、渡辺泰伸(仙台育英学園)、進藤秋輝、加藤道男、斉藤吉弘、佐藤則之、千葉保、柳沢和明(宮城県教育庁文化財保護課)、桑原遊郎、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、丹羽茂、後藤秀一(宮城県多賀城 跡調査研究所)、藤沼邦彦村山城夫、小井川和夫、佐々木常人、吉沢幹夫、笠原信男(東北歴史資料館)、田中則和、佐々木和博(仙台市博物館)、加藤稔(山形県立博物館)、藤原妃敏(福島県立博物館)、金森安孝、平間亮輔、佐藤淳(仙台市文化財課)、寺島文隆、安田稔、飯村均、吉田秀享、新堀昭宏(福島県文化センター)、萩原恭一、小林信一(千葉県埋文センター)、舘野孝、新井真博(東京都埋文センター)、高橋一夫(埼玉県埋文事業団)、関清(富山県埋文センター)、梶原洋、会田容弘、佐久間光平、仙波伸久(東北大学考古学研究室)、長崎潤一、橋本博文(早稲田大学文化財調査室)、窪田蔵郎

A・P ディレビヤンコ、R・S ワシリェフスキー(ソビエト科学アカデミー) (順不同) <新田遺跡、山王遺跡>

- 1. 調査協力:熊谷春男、柳原胞三、熊谷俊雄(地権者)(旬太伸興業、旬城不動産商事
- 2. 調査参加者:赤間かつ子、阿部敏子、阿部美智子、阿部美津子、阿部米子、井川温子、遠藤一代、大山貞子、加藤文一、黒崎庸治、熊谷あつ子、熊谷きみ江、後藤はつみ、桜井栄子佐々木四郎、佐藤一子、千葉享一、角田静子、渡辺園恵

## 本文目次

序 文	
例 言	
調査体制	
調査要項	
I . 柏木遺跡	
1. 柏木遺跡の立地と環境	2
2.調査に至る経緯	2
3. 調査方法と経過	4
4. 調査成果	6
(I) B地区 ······	6
<b 地区の地形と地質=""></b>	6
<出土層位と出土状況>	9
<7 層上面の主な石器>	9
<7 層上面石器群の小括>	13
(1) 各石器集中地点のまとめ12 (2) 7層上面石器群の位置づけ…13	
<成果と今後の課題>	13
(Ⅱ) A 地区 ··································	17
(1) 製鉄炉17 (2) 木炭窯23	
(3) 竪穴住居跡30 (4) 土坑32	
(5) 特殊遺構34	
< 発見遺物 >	35
<まとめ> ····	36
炉材粘土他耐火度測定報告	41
写真図版	43
Ⅱ. 新田遺跡(後地区)	56
1. 調査要項 2. 遺跡の立地 3. 調査成果 4. まとめ	
Ⅲ. 新田遺跡(西地区)	60
1. 調査要項 2. 遺跡の立地 3. 調査経過 4. 調査成果 5. まとめ	
Ⅳ. 山王遺跡	64
1. 調査要項 2. 遺跡の立地 3. 調査経過 4. 調査成果 5. まとめ	
写真図版	67

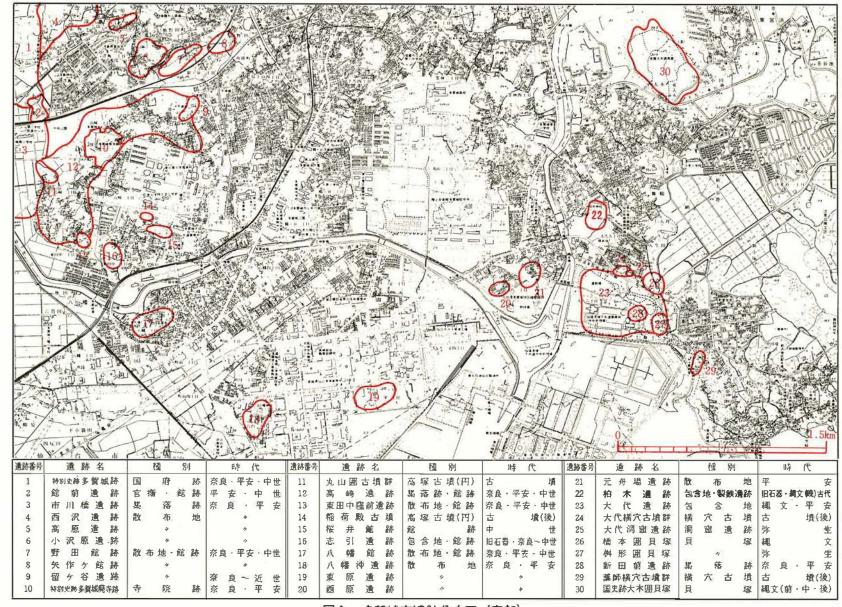


図1 多賀城市遺跡分布図(東部)

## I柏木遺跡

## 1. 柏木遺跡の立地と環境

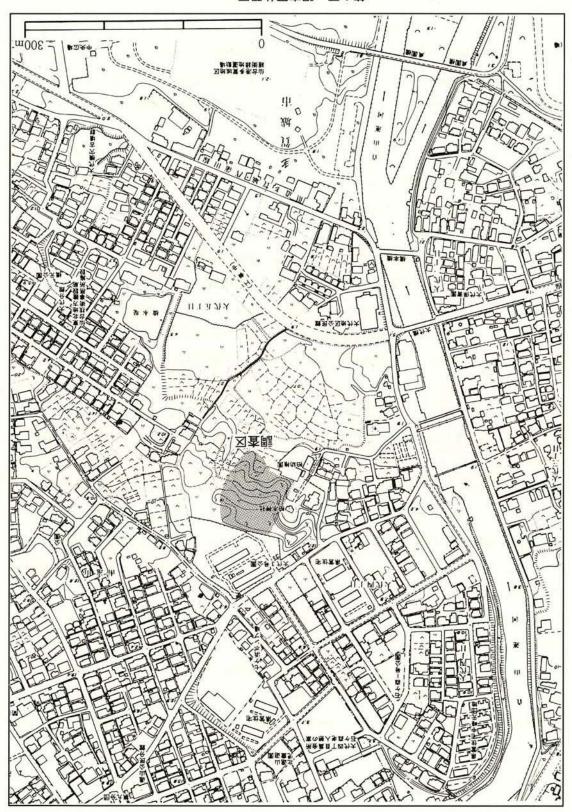
柏木遺跡は、多賀城市大代5丁目に所在する。本遺跡が立地している丘陵は、松島丘陵より派生してきた小起状低丘陵であり、新第三紀に形成された砂岩、及び凝灰岩質砂岩によって形成されている。

本遺跡の周辺には、各時代にわたり多くの遺跡が所在している。主なものをあげれば、縄文時代では、大木式の標式遺跡である国指定史跡大木囲貝塚、他に左道貝塚、鬼ノ神貝塚などが知られている。弥生時代のものでは、「籾痕のある土器」で著名な桝形囲貝塚がある。古墳時代のものでは、本遺跡の立地する丘陵の斜面を利用して、大代横穴古墳群、桝形横穴古墳群、砂山横穴古墳群、薬師横穴古墳群などの多くの横穴古墳が造営されている。さらに奈良・平安時代には、本遺跡の南側に広がる沖積地に、東原遺跡、西原遺跡、元舟場遺跡、大代遺跡が所在しているが、発掘調査がほとんど実施されていないことや、遺跡が煙滅するなどして、その所在、内容については不明なものが多い。以上のように本遺跡の周辺は古くから人間が居住する生活環境に適していたものと思われる。

## 2. 調査に至る経緯

本調査については、昭和61年4月に本遺跡を含む周辺の宅地造成工事が大和団地株式会社より提示されたため、本件開発計画について協議を行った。当該地については、昭和54年度の分布調査による土器片と鉄滓が若干採集されていただけで、遺跡の性格や範囲が全く不明であったため、昭和61年5月に再び現地踏査を行った。その結果、丘陵斜面部の10ヶ所の地点で土師器、須恵器、鉄滓を採集することができ製鉄に関連する遺構の存在が予想された。この成果をもとに対象となった開発区域は約4万㎡と広大な面積であるため、沖積地、丘陵地に分けて試掘調査を実施することとなった。沖積地は、同年8月に行ったが縄文土器、炉壁片が若干出土しただけで製鉄に関連する遺構は検出できなかった。そこで、沖積地と丘陵部を工区分けして、丘陵部については、発掘調査を実施することで了承を得た。丘陵部の試掘調査は、昭和62年6月に行い製鉄炉、木炭窯を発見した。製鉄に関連する遺構、遺物が顕著に認められたため、申請者と再度協議を行い、本調査について全面的な協力が得られた。よって昭和62年8月17日より調査を実施した。

図置か図査鵬 図「葉



## 3. 調査方法と経過

今回の発掘調査は、昭和62年6月に行った試掘調査の成果をもとに丘陵斜面部約2500㎡を対象とした。発掘基準線は、国家座標の方位をとっており、東西基準線Ⅳ—01と南北基準線D—aの交点は、X:−198,600.000、Y:+18,300.000である。この基準線をもとにして、開発対象区域内を一辺3mのグリットで区画した。各グリットの呼称は第11図のとおりである。

本調査は、8月17日より開始した。はじめに重機・人手による表土剝ぎを行った後(9月20日)、東側丘陵斜面部の遺構検出作業に入り1.2号木炭窯を発見する。検出時には、尾根に直交する3本の溝状プランが窯本体と見られたが、掘り進めるうちに、これらは2基の本炭窯に取り付く作業場であることが判明した。また、これとほぼ並行して製鉄炉が存在する上段の平場の遺構検出も行い炉本体、付属施設等を確認する。炉本体・作業場は直接重複関係はないが、廃滓場の鉄滓層の関係により中央の3号炉が一番新しいことが知られた。

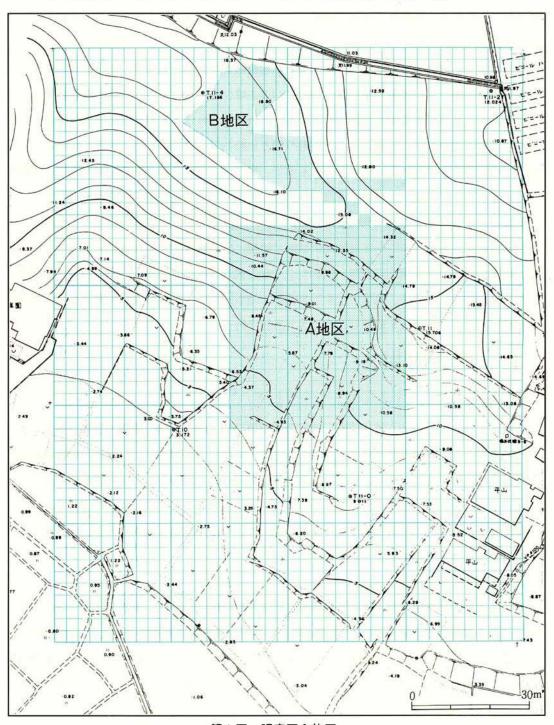
また、前後するが9月中旬頃には、丘陵頂部平担面のL字形試掘トレンチの再調査を石器文化談話会の協力により実施し、3層上面・5層上面から1点ずつ、さらに7層上面から10点の旧石器を発見した。この調査成果によりこの地区の発掘調査の必要性が高まった。そこで当埋文センターでは申請者と協議を行い、急拠旧石器時代の調査を組み入れることとした。そして、これまで調査を行っていた斜面部をA地区、平担部をB地区と呼ぶことにした。

B地区の調査は、1500㎡を対象とし、その内約750㎡を調査した。10月1日より重機・人手による表土剝ぎを開始し、10月12日より2・3層の精査と基準杭・地区杭の設定をした。順次4・5・6層と調査を進めいくつか石器が発見された。10月24日にいたって、BI区の北東方向から入る谷頭付近で、それを練むように数十点の石器が7層上面から出土した。そこで、BI・BII・CI・CIの7層上面を精査した結果、BI・CI区を中心に186点の石器が5ケ所のまとまりをもって発見された。この内、第5石器集中地点などの23点の石器を脂肪酸分析用に採取した(11月11日~16日)。また、第1・5石器集中地点を中心に残留磁化測定用の土壌を採取し(12月10日~16日)、他に土壌分折、プラントオパール用の土壌も採取した。最後に、7層上面の等高線図、各セクション図、谷地形図を作成し、補足調査を行い12月19日にB地区の調査を終了した。

一方、A地区の調査はB地区と並行して行い10月20日より3~5・6号木炭窯の調査を開始した。3~5号木炭窯も付属施設をもち1・2号木炭窯とほぼ同様の構造をもっていることが判明した。1・6号木炭窯の調査が終了したのは11月25日である。 製鉄関連遺構はこの間も継続して調査しており、各炉の作業場、廃滓場に幅30cmの縦横断サプトレンチを入れ、鉄滓の堆積状況を確認する。また、1号炉本体の調査では半地下式竪型炉と呼ばれる構造を呈し

ていることが判明し、炉背に送風施設を伴っていることも確認した。

12月中旬頃からは下段平場の調査にも入った。この平場からは竪穴住居跡 3 軒、土城 3 基、特殊遺構 4 基が検出された。 SI 02・03 竪穴住居跡、S X 04 特殊遺構は、西側に隣接して構築されており、鍛治炉、鍛造剝片が検出されたことから鍛治工房跡と判明した。



第2図 調査区全体図

これまでの調査で、本製鉄遺構は、奈良時代に属し、多賀城跡との関連性を強くもつ本格的な鉄生産遺構であることがわかり、古代東北地方の歴史上極めて重要な遺構であることが指摘されるようになった。12月2日は県教育委員会文化財保護課、12月14日には文化庁記念物課松村文部技官の現地視察があり、調査方法、調査期間の延長、遺構の保存等について話し合いを行った。その結果、調査は1月以降継続して実施し、調査費用は国庫補助事業の経費を投入することになった。

昭和63年度の調査は1月7日より開始した。1号製鉄炉作業場・廃滓場、3号製鉄炉本体、2号製鉄炉廃滓場、SI04竪穴住居跡、SK02・03土城、SD03(A・B)溝跡の調査を引き続き行う。1号製鉄炉作業場を完掘したところ、その東壁ぎわに4号製鉄炉を検出した。4号製鉄炉は半地下式竪型炉の形態をとるが、他の炉と比較して小型であった。また、SK02・03土城については、不整形の土城が集まったもので、掘り込んでいる基本層の土壌から粘土採掘城と考えられた。この頃には本遺跡の遺構の全容が明らかになり、製鉄に関連する施設がコンパクトにまとまっていることが判明した(2月中旬)。2・3号製鉄炉本体についても半地下式竪型炉とわかり、基本的に1~3号製鉄炉は同じ炉型、付属施設で構成されていることが知られた。最後に各炉の平面図、立面図、横断セクション図を作成し、製鉄炉についての調査は終了した(3月中旬)。この後、遺構の全景写真撮影、地形図作成、整地層の範囲確認などの補足調査を行い、すべての調査を終了したのは3月31日である。

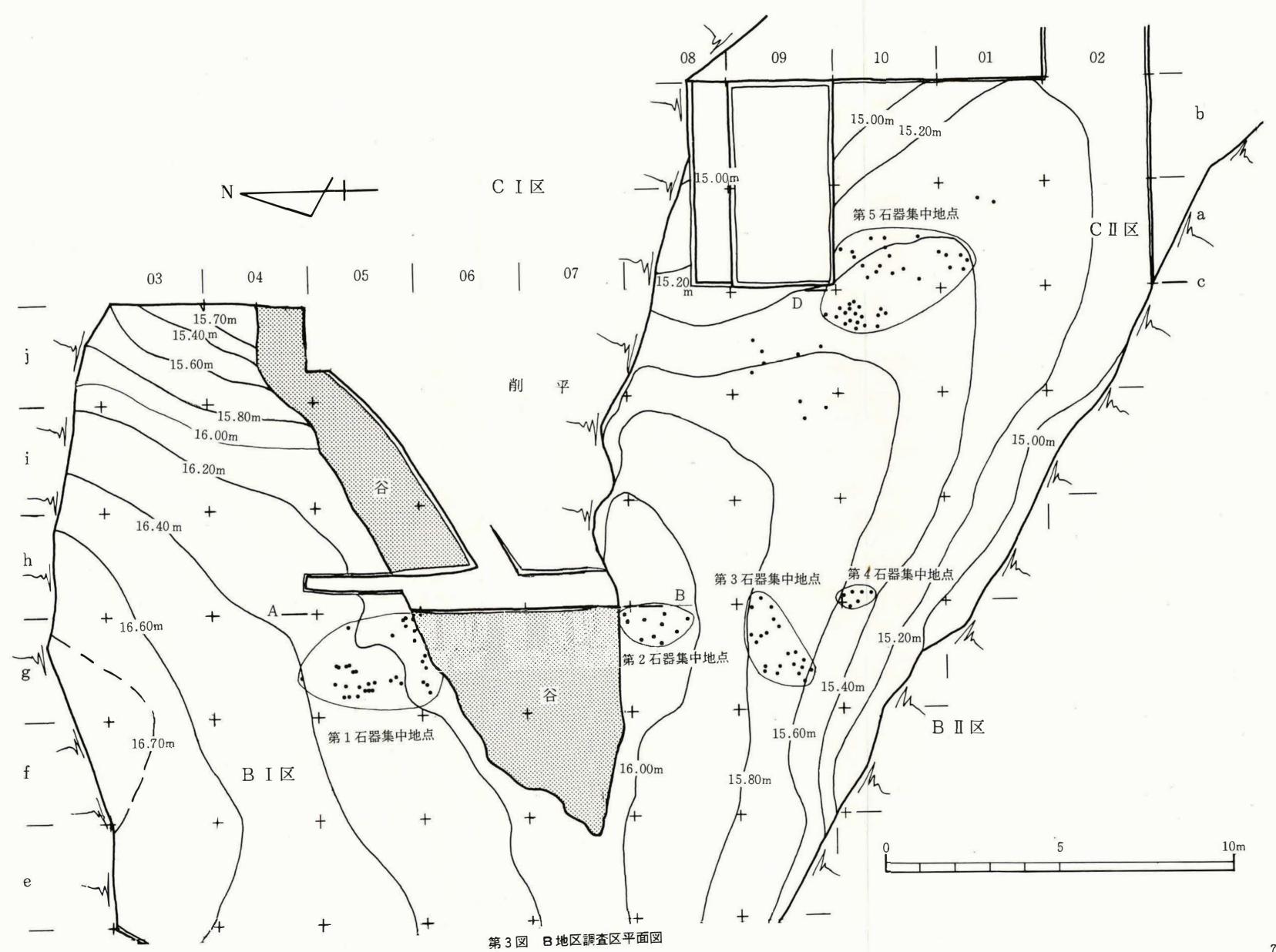
## 4. 調查成果

#### (I) B地区

B地区では、旧石器時代前・中期、後期の石器群、縄文時代晩期の遺構・遺物、奈良・平安時代の遺物などが発見されている。しかし、これらについて整理途中で、考古学的な検討も十分に行なわれていない。また、地形・地質学的にも残された問題があり、脂肪酸分析、プラントオパール分析、残留磁化測定、熱ルミネッセンス法・電子スピン共鳴法年代測定などについて分析途中、あるいは分析依頼予定である。そこで、今回は紙面の制約もあり、B地区最下層の7層上面について簡単に記したい。

#### <B 地区の地形と地質>

多賀城市周辺の地形細部と更新世堆積層については不明な点が多い。大ざっぱに三畳紀、中新世、鮮新世基盤の標高50~100mの塩釜丘陵が、塩釜・利府から南西方向に大きく張り出し、その張り出し周辺に標高20m前後~50mの平坦な丘陵が貼りつき、仙台平野に至る(北村ほか1986)。柏木遺跡B地区(以下B地区)はこのような丘陵の東端付近に立地し、現海岸線から約2kmの所に位置している。



B地区が立地する丘陵の平坦部は標高15~17mである。北側には北東方向から谷が入るが、 全体になだらかで、七ケ浜町遠山の丘陵に向って再び高くなっている。これに対し、南側では 急激に傾斜して沖積面に至る。

先に、柏木遺跡の西方約3.5kmの志引遺跡が立地する丘陵の平坦化を下末吉海進期と考えた (鎌田 1984)。これに対して柏木遺跡の平坦化は下末吉海進期、あるいはそれ以前であろう という考えもある。いずれにせよ、両遺跡が立地している丘陵は大体同じ標高であり、鮮新世 基盤の経灰岩上に堆積している更新世堆積層は似た状況にあるので、これらはほぼ同時期に平 坦化したと考えられる。

柏木・志引遺跡周辺のこのような丘陵上には数十cm~1 m の更新世の地層が堆積している。 大ざっぱに、表土、褐色土、明褐色火山灰、赤褐色粘質土の順となっている。志引遺跡の調査や周辺の踏査によって、明褐色火山灰は旧石器時代後・晩期に、赤褐色粘質土は旧石器時代前・中期に形成されたものと考えられている(山田 1984、鎌田 1984)。

B地区の基本層序は第4図に記してある。3層が明褐色火山灰に、4層以下が赤褐色粘質土に相当し、7層は鮮新世凝灰岩の風化した層で志引遺跡9層と酷似する。そして、北東方向から入る谷の谷頭付近では少なくとも2回以上の侵蝕が認められた。最も新しい埋土①~③層は4層を侵食しており、谷頭が完全に埋没した後に3層が部分的に堆積している。谷埋土④層以下は古い谷の埋土で、埋土⑧層は基盤の凝灰岩に直接堆積している。

#### <出土層位と出土状況>

B地区では、縄文時代晩期の遺物は主に2層から出土し、旧石器時代の遺物は3層中、5層中、7層上面、谷埋土上部から発見された。石器がまとまりをもち、明確に生活面が認定できたのは7層上面においてである。

7層上面では、北東方向から入る谷の北側に1 ケ所、南側で東にのびる尾根上に4 ケ所の石器集中地点が発見された。ここでの石器集中地点は便宜的に見た目でとらえたもので、それらの中には $1\sim 2$  m の小さなまとまりをもつものもある。

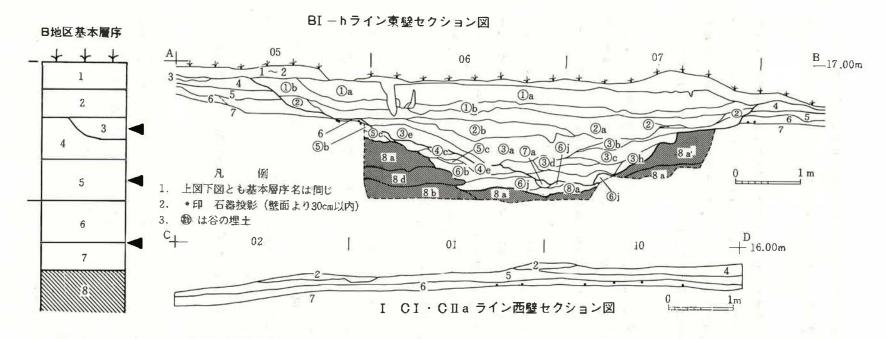
なお、7層は基盤の凝灰岩が風化した層で、それを覆う6層との堆積関係から7層上面出土 の石器群相互に層位的な違いは認められない。

#### <7層上面の主な石器>

7層上面では、計 126点の石器が発見されたが、ここでは先述した諸事情により主な石器に限って簡単な説明に留め、層性表などは後日掲載する。なお、石材の鑑定は蟹沢聡氏によるが、暫定的な観察であり、今後の分析によって変更もありうるとのことである。

#### 第1石器集中地点 (第5図) 石器34点

2、6、7はスクレイパーである。2は両面とも焼けハジケがあり、熱ルミネッセンス法・



B地区基本層序観察表

CIートライン東壁谷埋土観察表

屬序	層風四	土 色	土 性	粘性	硬度	^	含有	物	備	考	層序	層項can	± 1	色	土	性	粘性	硬度	\$	有	物	儬	考	
1	10	10YR %暗褐色	シルト	弱	軟	腐食多量			表土		1	40-60	7.5Y R %明	褐色	シルト		弱	硬	∮ 10mm	以下の	<b>湖色、灰</b> 多量に含む	3 層 以	以前、 以後	新
2	10-20	10Y R 光度を	砂質シルト	無	硬	# 20mmに お片を少	下の総ク量含む	色凝灰			2	10-50	7.5Y R %明	褐色	ij.		4	やや軟		下の褐色	、灰白の樹	細かし発達	·業理	いい谷
3	5-20	10Y R %明黄褐色	1	"	*	•		7	火山	天	3	20-50	10Y R %黄褐	8色	4		*	*	4		4			埋土
4	10-25	5 Y R %赤褐色	シルト	弱	やや硬				赤色	乱化	4	<b>15</b> —30	10Y R %黄檀	200	砂質シ	ルト	"	やや硬	∮ 20mml) 灰岩片(特	下の原(白)を	白、梅色の種			1
5	10-25	4 0	"	*	"	▲ 10mm以 仮岩片を	下の灰	自色を	,		(5)	20-30	2.5 Y R 光明:	赤褐色	シルト		"	1.	P CUmm	PY L 0)	灰白、樹 葉に含む	柱1-土	は散却に	67
6	10-30	5YR%明赤褐色	"	中	中		多量(509	6)1=3Cr	.>		6	10-40	2.5Y R %明病	赤褐色	*		<b>第一</b> 华	4		以下の	灰白の健			谷
7	5-10	7.5Y%明褐色	粘土質シルト	. "	やや質	ø 50mm比 灰岩片を	バーの灰 多量(7 <b>0</b> 9	白色雑	8層の	風化帯	7	10-30	10Y R %明黄	褐色	粉土質	シルト	弱	"	∮ 30mm	以下の	拠色、白			埋
8		2.5Y%灰白色	7	*	硬				基盤	展灰岩	8	10-40	10Y R %明黄	褐色	+		,	硬		LIFO	個色の質			1±

第4図 柏木遺跡B地区セクション図

電子スピン共鳴法による年代測定を依頼する予定である。6、7はいずれも石核を素材としている。

14は石核かもしれないが、図下端は平坦に整形してあり、図上端の刃部には微細剝離痕が認められチョッピング・トウールとした。

9は鋸歯縁石器で、図の右側縁と裏面に両極剝離痕があり、整形と考えられる。

8、10、11、12、13は石核で、8、10は多面体形、11は基本的に円盤形である。11、12は剝 片剝離後に二次加丁が施されている。

3、4、5は二次加工ある剝片、1は微細剝離痕ある剝片である。

2、4、6、7、9、13、14は玉髓、3、5、11、12は珪質頁岩(註)、1、8は珪化凝灰 岩で、いずれも緻密・ハリ質である。10は変質安山岩または石英安山岩で、粒子がやや粗い。

他に、石核が5点、二次加工ある剝片・微細剝離痕ある剝片などが15点出土し、玉髓が非常に多い。

#### 第2石器集中地点(第6図1~6) 石器10点

1は石核(?)素材の二次加工ある剝片である。

2~6は石核で、3、5、6は多方向からの剝片剝離痕をもち、6は円盤形を呈する。2は上下の平坦打面から同一方向に数枚の剝片を剝離する。4は剝片素材で、基本的に直交する剝片剝離痕をもつ。

4、6は玉髓、1、5は碧玉、3は珪化木、2は珪質頁岩である。

他に、二次加工ある剝片、微細剝離痕ある剝片など4点があり、玉髓、碧玉、珪質頁岩などがある。

#### 第.3 石器集中地点(第6 図7~14) 石器21点

7は二次加工ある剝片、8は石錐である。10は彫刻刀石器?、12は両極剝離痕ある石器で、これ自体石核かもしれない。

13は多方向からの剝片離痕をもち、円盤形石核である。14は上下両端に打面を固定して、それぞれ同一方向に剝片を剝離し、その後打面以外に二次加工を施している。

9は微細剝離痕ある剝片、11は剝片である。

7、8、10、11は玉髓、9は珪化凝灰岩、12は碧玉、13は流紋岩(珪化)、14は珪質頁岩である。

他に、彫刻刀形石器又は石錐が1点、両極剝離痕ある剝片が1点、微細剝離痕ある剝片・ 剝片が11点ある。玉髓が最も多く、次いで珪質頁岩、碧玉、珪化凝灰岩となる。

#### 第4石器集中地点(第7図1・2) 石器6点

1は先端が尖頭状を呈するスクレイパーで、珪質頁岩であり、2はスクレイパーで、黒色頁岩である。

他に、二次加工ある剝片、微細剝離痕ある剝片が4点あるが、玉髓・碧玉は1点もない。

第5石器集中地点(第7図3~10) 石器41点

第5石器集中地点のCI・CⅡ-aライン以東の23点は脂肪酸分析を依頼中で、石器に関して一切不明である。

3は石錐で、先端が磨耗している。

4は両面加工石器で折れており、ヘラ状石器の基部と考えられる。

5 はスクレイパー、6~10は二次加工ある剝片で、6 は半両面加工であり、9 は最大厚 1.3 cmと部厚い。

3は玉髓、4は珪化凝灰岩、5、7、8~10は珪質頁岩、6は流紋岩である。

他に、石核が2点、二次加工ある剝片・微細剝離痕ある剝片などが9点出土し、玉髓・碧玉が 多く、珪質頁岩、流紋岩などがある。

これらの石器集中地点の他に、第5石器集中地点の北西部で9点、南東部で2点発見されているが、後者は脂肪酸分析中のため不明である。

前者の内、第7図11は微細剝離痕ある剝片、12、13は二次加工ある剝片で、13の先端付近に 急角度の二次加工が施されている。他に二次加工ある剝片、微細剝離痕ある剝片などがある。 11はかなり珪化した凝灰岩質頁岩、12は珪質頁岩、13は珪化凝灰岩であり、他に玉髓1点だけ 認められる。

#### <7層上面石器群の小括>

#### (1) 各石器集中地点のまとめ

第1石器集中地点では、玉髓が半数以上を占める。石核が多く、スクレイパー、チョッピング・トウール、鋸歯縁石器などがあり、大きさにばらつきがある。

第2石器集中地点では玉髓と珪質頁岩が相半ばする。石核が多いが、定型的石器は少なく、 やはり大きさにばらつきがある。

第3石器集中地点では玉髓が最も多く、珪質頁岩も数点見られる。各種の石核、石錐、彫刻 刀形石器?、両極剝離痕ある石器などがある。

第4石器集中地点では珪質頁岩、黒色頁岩などの石材で、玉髓は1点もない。尖頭状のスクレイパー、スクレイパー、二次加工ある剝片などがあり、いずれも3~5.5cmとやや大形である。

第5石器集中地点は最も広範囲で、出土点数も多い。脂肪酸分析用の石器を除外すると、玉 6世と珪質頁岩が過半数を占める。石錐、ヘラ状石器?、スクレイパー、二次加工ある剝片、石 核などがある。

この他、第5石器集中地点北西部の石器群は、珪質頁岩が多く、玉髓は1点だけである。 以上のように、層位的には同一層理面から出土していながらも、それぞれの石器集中地点の あり方にちがいが認められる。

#### (2) 7層上面石器群の位置づけ

石材については、玉髓が第4石器集中地点を除いて各石器集中地点に認められる。第1・2・3石器集中地点では玉髓が半数以上を占め、第5石器集中地点では玉髓と珪質頁岩を合わせて半数以上となる。

石器の種類として、いわゆる定型的な石器が少ない反面、二次加工ある剝片・微細剝離痕ある剝片が多い。また、第1・2 石器集中地点には各種の石核が多く、これまで座散乱木遺跡(石器文化談話会 1983)、志引遺跡(多賀城市 1984)、馬場壇A遺跡(東北歴史資料館など1986)で想定された剝片剝離技術のすべてをそろえているようである。この他、柏木 7 層上面には平坦な両設打面からそれぞれ同一方向に数枚の剝片を剝離した石核も見られる(第5 図11、第6図2・5)。 今のところ、石材の大部分は緻密・ハリ質であるためか、石材による石器製作技術のちがいは認められない。

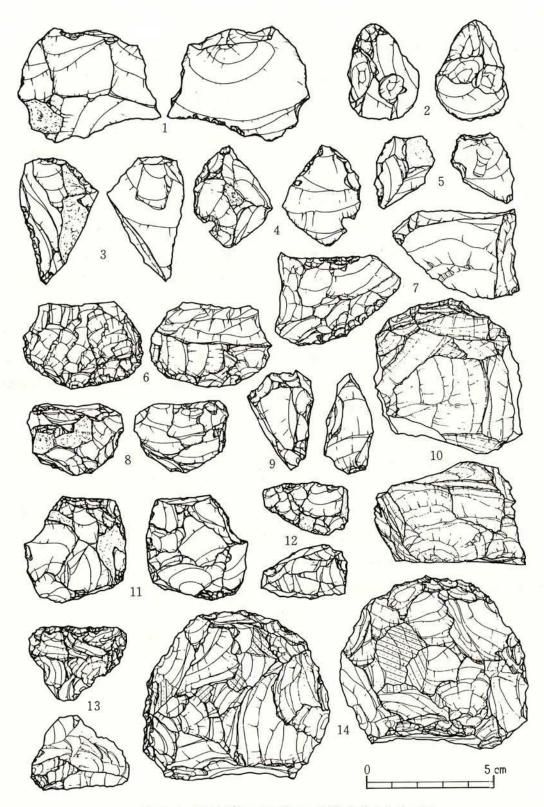
今日、宮城県の旧石器時代前・中期石器群は、江合川流域の層位的な出土例を軸としてA群→B群→C群という変遷が考えられる(鎌田 1987)。この変遷において、それぞれの石器組成の完全な全体像は必ずしもつかめていないが、柏木7層上面石器群は、石材・石器製作技術を概観してみると、A群・B群双方に共通する点がいくつかある。

#### <成果と今後の課題>

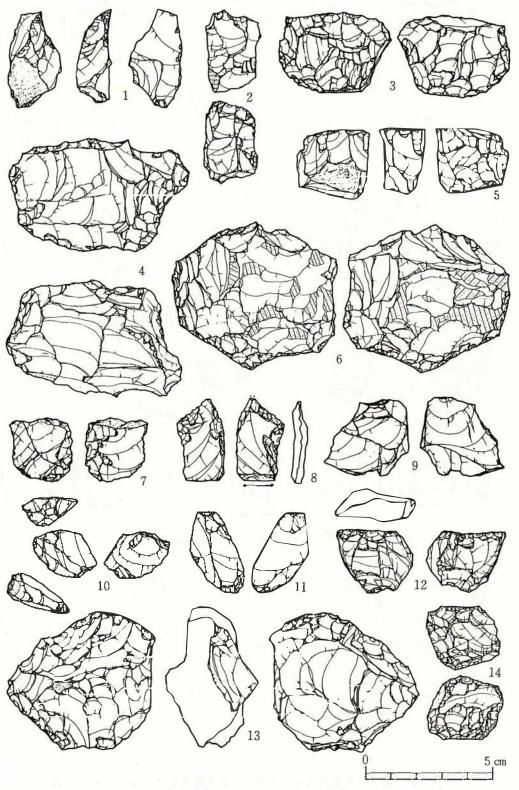
- 1. 柏木遺跡B地区では、旧石器時代前・中期として最大規模の約750 miの範囲が調査された。
- 2. その結果、7層上面では北東方向から入る谷の北側に1ケ所、南側で東へのびる尾根上に4ケ所の石器集中地点が発見され、この他を含めて計126点の石器が出土した。
- 3. 旧石器時代前・中期で初めて、地形全体における石器の残され方が明確に表わされた。
- 4. 加えて、隣接する関連諸科学の分析・測定の結果によって、B地区7層上面における生活の実態が復原される見通しを得た。
- 5. 種々の考古学的分析と周辺遺跡との関連を検討して、各石器集中地点相互の関係、編年 的位置づけを明らかにせねばならない。

#### 註

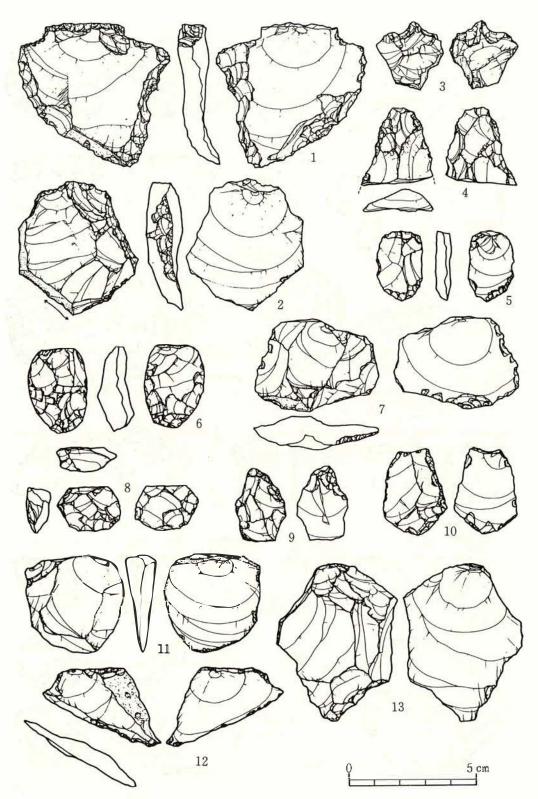
ここで言う"珪質頁岩"の中には、山形県寒河江市周辺で見られる表面が灰色のものとは異質な鉄分を含んだ赤褐色のものもある。



第5図 柏木遺跡 B地区第1石器集中地点出土石器



第6図 柏木遺跡 B 地区第2·3石器集中地点出土石器 (1~6 第2石器集中地点、7~14 第3石器集中地点)



第 7 図 柏木遺跡 B地区第 4 · 5 石器集中地点、その他出土石器 (1.2 第4 石器集中地点、3~10 第5 石器集中地点、11~13 その他)

#### (II) A地区

#### (1) 製鉄炉

製鉄炉は4基検出している。4基の炉の位置関係は西から順に1号、3号、2号と直線的に配置しており、4号は1号と3号の間に位置している。炉の切り合い関係は、1・2号を3号が切っており、炉の中では最も新しい時期にあたる。1・2号は切り合い関係をもっておらず、新旧は不明である。また、4号は1号によって切られており最も古い時期にあたる。炉の北側は部分的に整地を行ない、テラス状の平場を造り、付属施設を設けている。炉の南側は作業場から廃滓場へと続いている。

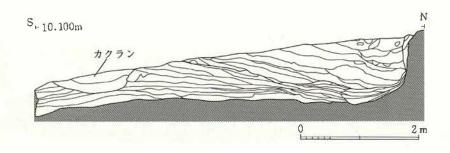
#### 1号製鉄炉

[構 造] 円筒形の半地下式竪型炉と呼ばれている形態である。炉前(南側)は、壊されており、全体の形状はとどめていない。内径70cm×70cm(推定)、深さは1.05mを計る。炉壁は、炉背東側上端にわずかに残存しているのみで、他は上半が掘り方埋土、下半は岩盤が露出している。炉背上端は浅い窪みとなっており長さ60cmの板状礫が横位に据えられている。炉内堆積土中からは、多量の大小礫が南側から流れ込んだ状況で出土している。この礫の中には、直接火を受けたものや鉄滓が付着しているものが見られる。

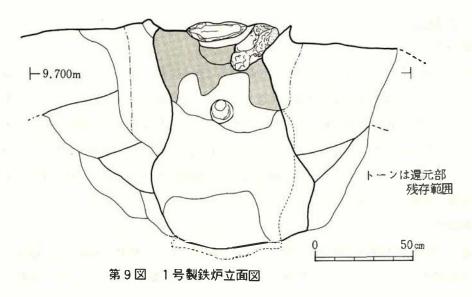
[付属施設] 上部平場には他の炉と同様に方形の掘り込み 2 基(長辺1.0m、短辺0.9m、深さ20~50cm)が配置されている。炉の中軸線上には、径20cm奥行き20cmの横穴状ピットがある。さらにその上部は一段高く、テラス状の平坦面があり、その際には、幅30~50cm、深さ10~50cmの溝がコの字型に巡っている。

炉の南側の作業場は、長辺約3m、短辺約2.5m、深さ約0.6m~1mを計る。それより南側には廃滓場が扇状に広がっている。作業場内堆積土は下層ほど水平に堆積するが、上層になるにつれて南から北へと傾斜している。土層は上層がシルトを中心としているが、下層は細かい鉄滓を含み、踏みかためられている。

〔遺物〕鉄滓、送風管、炉壁、砂鉄、土師器甕、須恵器甕、礫が出土している。



第8図 1号製鉄炉南北セクション図

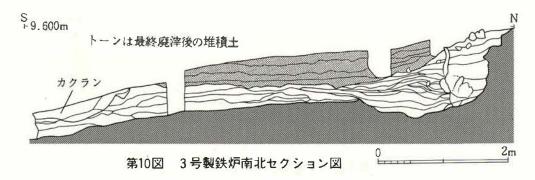


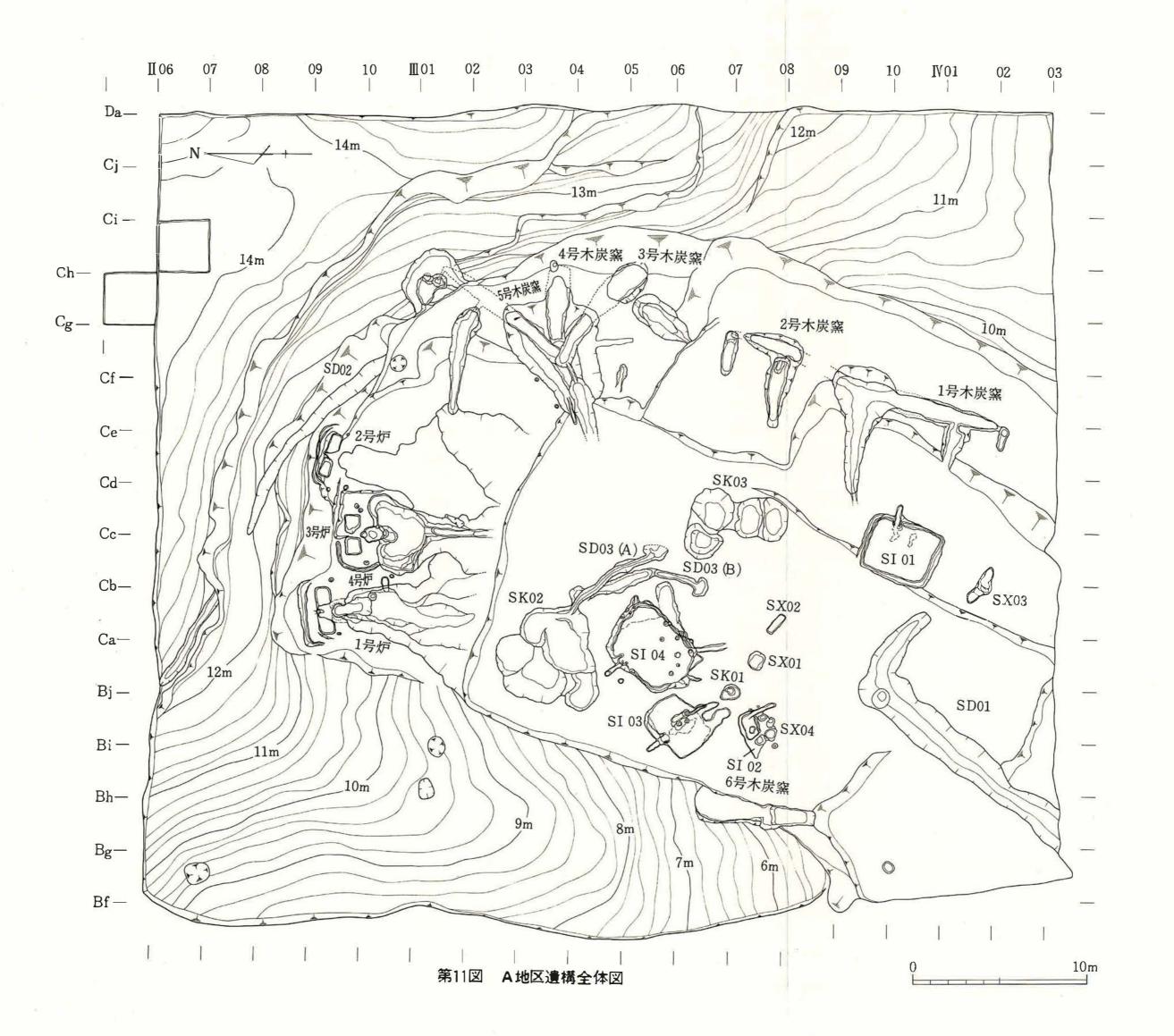
#### 3号製鉄炉

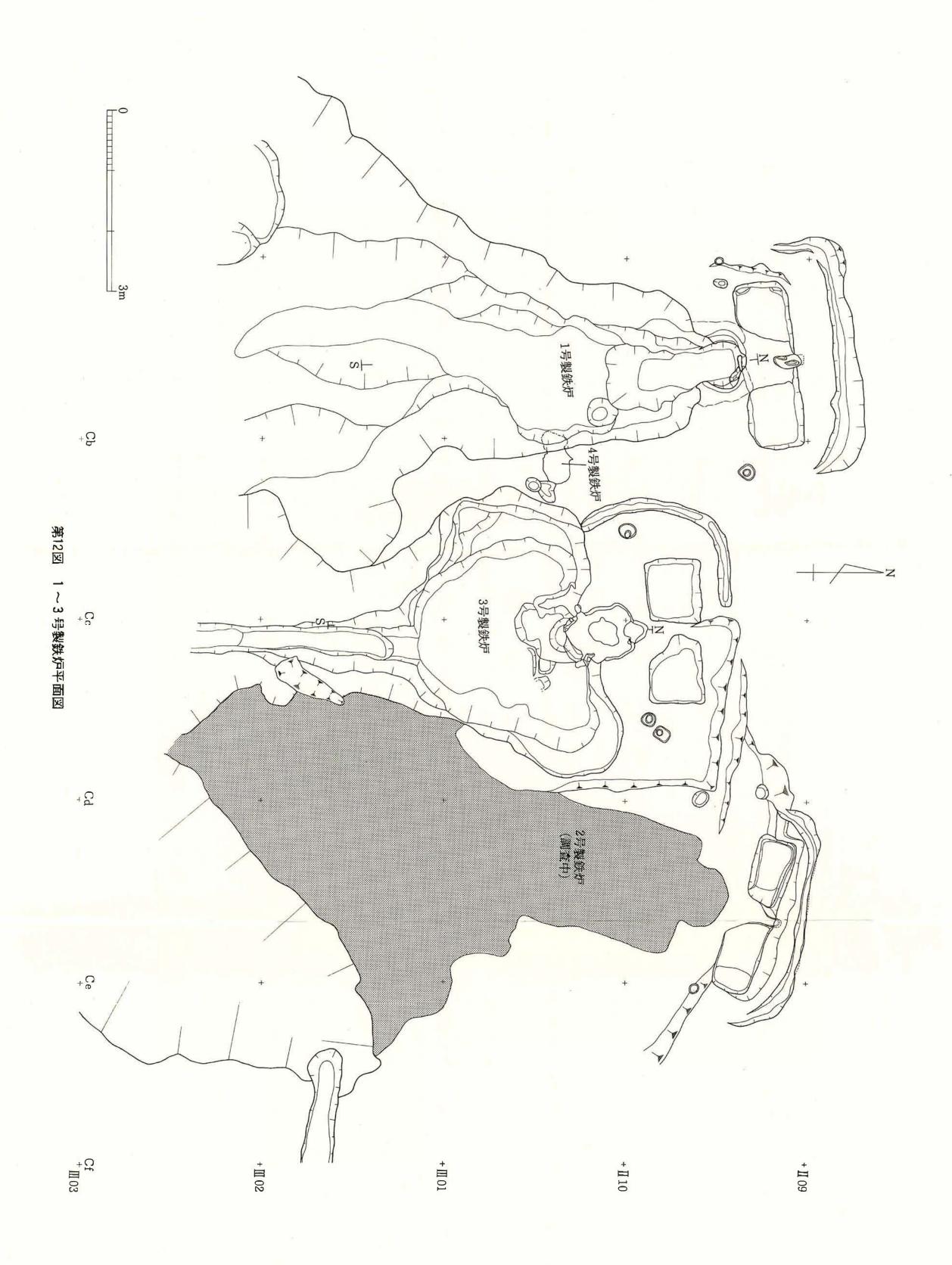
[構 造]他の炉と同様半地下式竪型炉である。確認面で炉内径が40×50cm、深さ約1 m を計る。炉壁はスサ入り粘土で作られており、少なくとも3枚の重なりが確認できる。これらは、炉の上半部に残存しており下半部は掘り方埋土が露出している。炉背部には、長楕円形の貫通孔が認められ、炉内には送風管が炉壁に付着したまま、ずり落ちた形で検出している。炉前の両側には50cm程の細長い石が立てられており、それを囲むようにして礫が横位に据えられている。また周辺にも10~20cm大の礫が散乱していた。

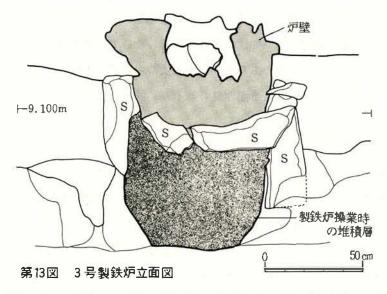
[付属施設] 上部平場には製鉄炉を中心として左右対称に長軸1.1 m、短軸0.9 m、深さ5~40cmを計る方形の掘り込みがある。この掘り込みの両端には柱穴が配置されている。また、これらを囲むようにして幅約20cm、深さ約5~10cmの周溝が巡っている。

炉の南側には、長辺4.5m、短辺2.5m、深さ約80cmを計る作業場が配置されている。この作業場南辺のほぼ中央には幅 $0.5 \sim 1$ m、深さ $5 \sim 40$ cmの溝が取り付き南方へ延びている。長さは約4mまで検出している。また、作業場内の炉前には長軸1.2m、短軸1mを計る楕円形の掘り込みがあり、西側にはカマドのソデに似た高まりが付いている。









「遺 物〕作業場内の堆積土、各層から多量の鉄 淬、炉壁、砂鉄、送風管、 土師器甕がある。溝にも 多量の鉄滓が充塡されて いた。

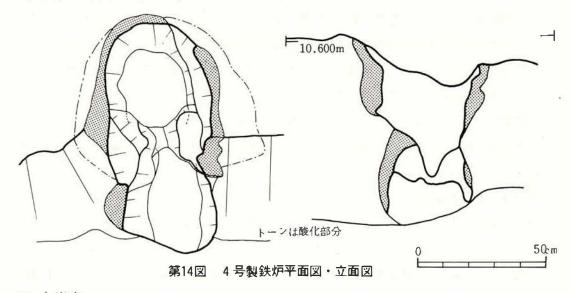
#### 4号製鉄炉

〔構 造〕他の炉と比較すると小型であるが同じ半地下式竪形炉の形態をとる。炉内径が38×40cm、

深さは60cmを計る。掘り方底面上には厚さ20cm程に焼土と木炭の混じった黒褐色シルトを敷き つめている。炉前には粘土を用いて浅い溝を造っており、湯口と考えられる。炉内壁は赤橙色 を呈しており酸化している。還元面はみられない。

[付属施設]炉前に長さ40cm、幅30cm、深さ $5\sim8$  cmの浅い窪みを造っているが、他については $1\cdot3$  号製鉄炉作業場に壊されており不明である。

〔遺物〕炉内堆積土中より土師器甕、炉壁片、鉄滓が出土している。



#### (2) 木炭窯

木炭窯は3基の製鉄炉をはさみ込むように、舌状に張り出す丘陵部東側に5基、西側に1基存在する。形態的に見ると、1号・2号木炭窯のように一つの前庭部を共有するもの、3号・4号・5号木炭窯に見られるように3基の木炭窯が一つの前庭部を共有しているもの、単独で

存在する6号木炭窯など3タイプがある。更に、4号・6号木炭窯を除いては、炭化室に付属施設として作業場が取り付いている。構造については、天井が崩落しないで当時の様子をとどめている5号木炭窯、更に、2号・3号木炭窯のあり方から地下式の木炭窯と理解できる。6号木炭窯については、場所、形態などが若干異なる面が見られるが、同様の構造をとっていたものと考えられる。

#### 1・2号木炭窯

丘陵部東側に位置する。窯本体の方向は、1号は北側、2号は南側に延びている。

[煙道] 1号木炭窯で確認された。炭化室の先端部より南側に延びる。煙道の先には長径1.4m×短径0.5mの長楕円形状の土塩に煙出しが伴っている。壁は黒色化して硬い。

〔炭化室〕 いずれも平面形は先端がすぼまる長方形を呈する。壁はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁面は赤化している。床面は黒色化して硬い。焚口部よりそれぞれ約16°、12°の傾斜をもって立ち上がっている。

[焚口部] 1号木炭窯については、炭化室との境が若干くびれて前庭部に続く。壁は赤化している。

[前庭部] 焚口部付近は丸みを帯びた不整形を呈する。炭化室と交差するように作られている。西側は削平を受け大きく削られている。

[中軸線の方向] 1号木炭窯N-21°-E、2号木炭窯S-15°-W

[付属施設] 1号・2号木炭窯の炭化室に取り付いている。平面形はいずれも方形状である。1号木炭窯の作業場は炭化室に連結する部分がすぼまる形態となっている。これに対して2号木炭窯にはトンネル状の穴が確認されている。床面は平坦面を呈している。壁は垂直に立ち上がり、連結部に近いほど黒色化している。

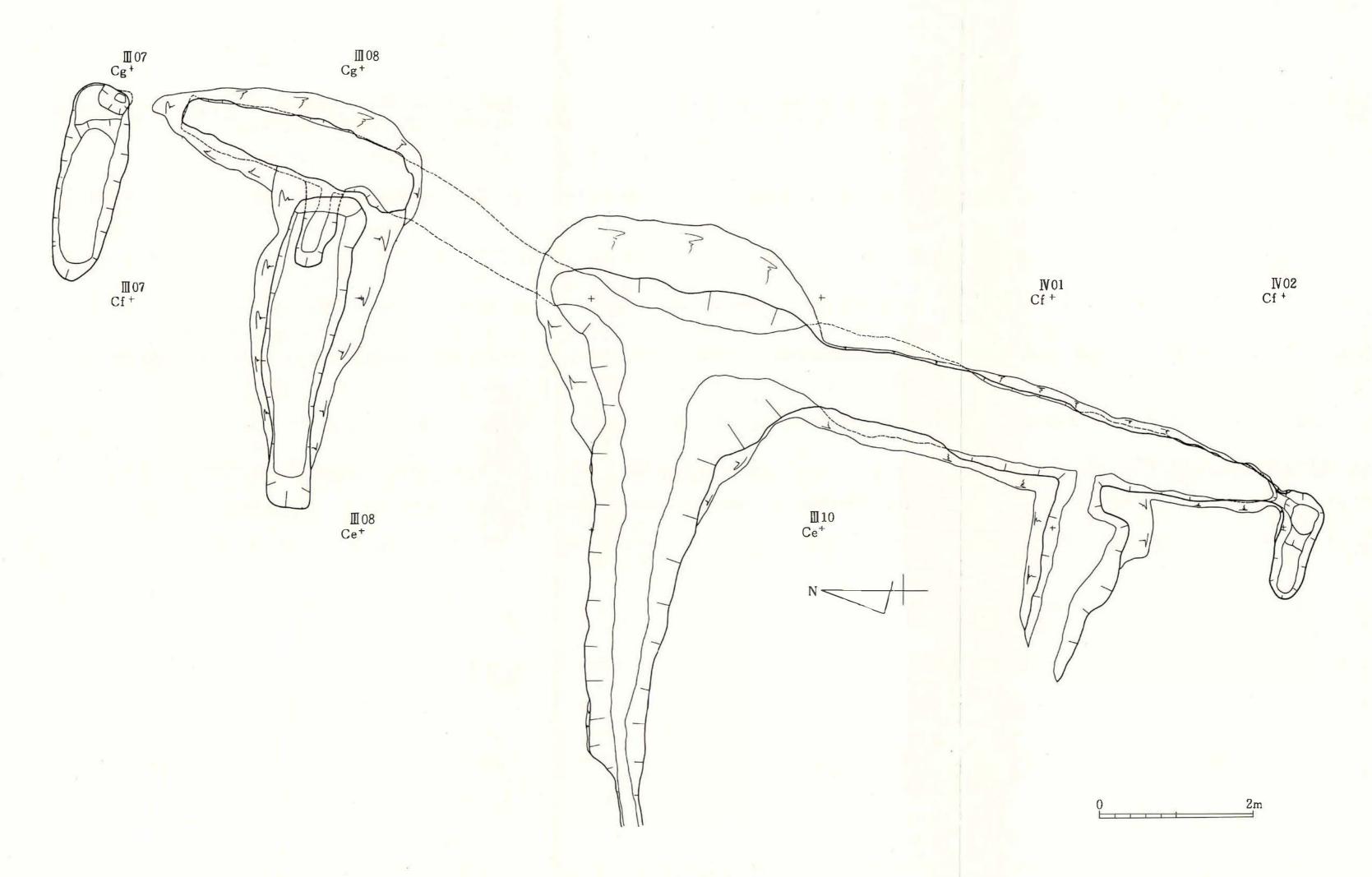
[規模] 1号木炭窯・奥行き7.64m (付属施設・奥行き2.11m、上幅0.8~1.1m) 2号木炭窯・奥行き7.32m、上幅0.4~0.8m (付属施設・奥行き4.63m、上幅0.53~1.78m・前庭部奥壁まで7.3m、上幅0.74m)

#### 3・4・5 号木炭窯

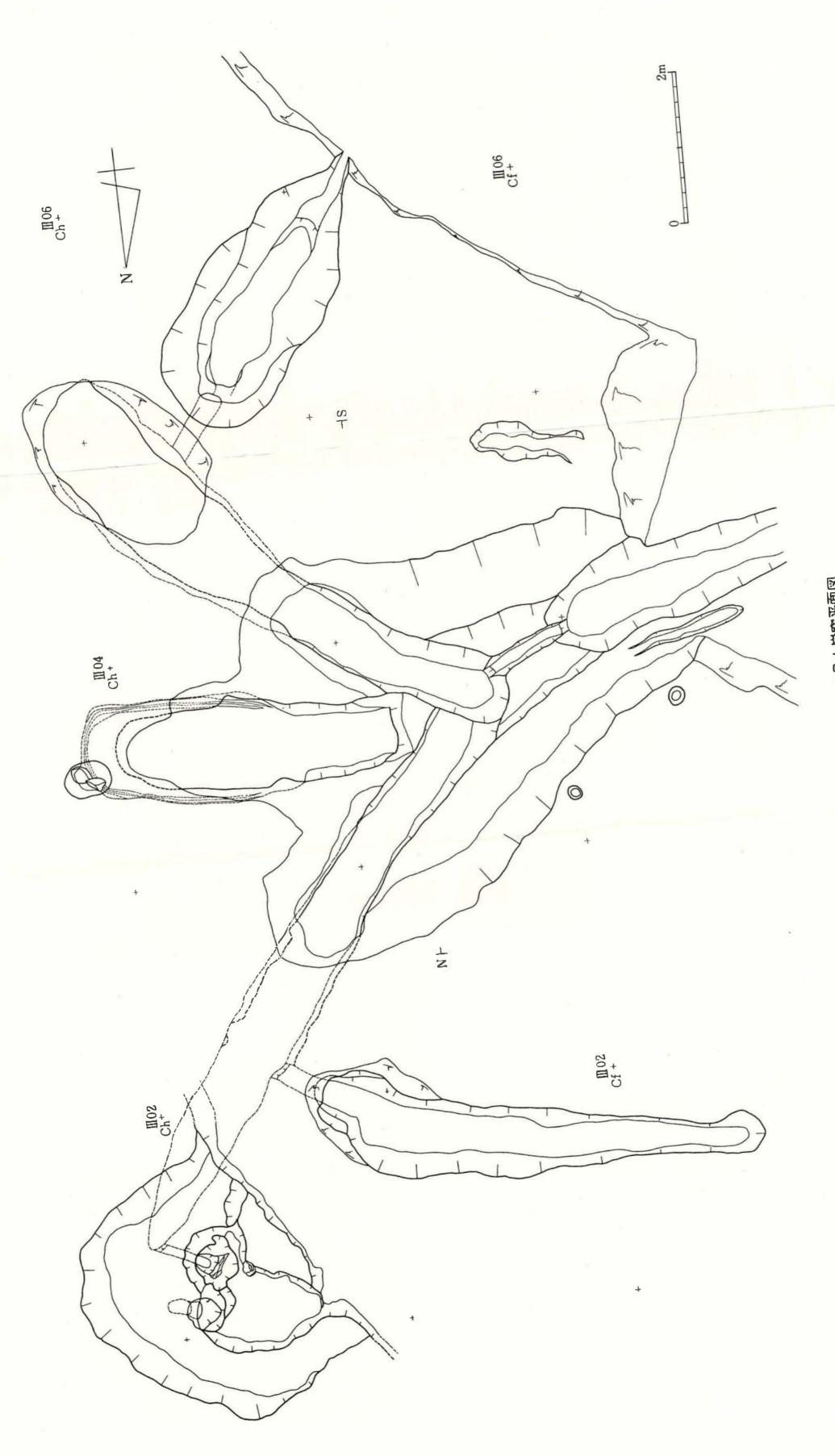
調査区東側丘陵部の奥まった場所にある。操業は前庭部に堆積した木炭層の層序により、4 号木炭窯が一番新しいことが判明した。

[煙道] 4号・5号木炭窯で確認されている。4号木炭窯は中軸線よりやや北側に位置する。炭化室の奥壁よりほぼ垂直に掘り込みを行ない、円形状の煙道が炭化室の外を上に延びている。壁は黒色化及び赤化して硬い。5号木炭窯は奥壁より右脇に取り付く。煙出し地点には、約3.5m×1.5mの掘り方状の施設を伴っている。

[炭化室] 3号木炭窯は方形、4号木炭窯は長方形、5号木炭窯は先端がすぼまる細長い長



第15図 1・2号木炭窯平面図



第16回 3·4·5号木炭窯平面図

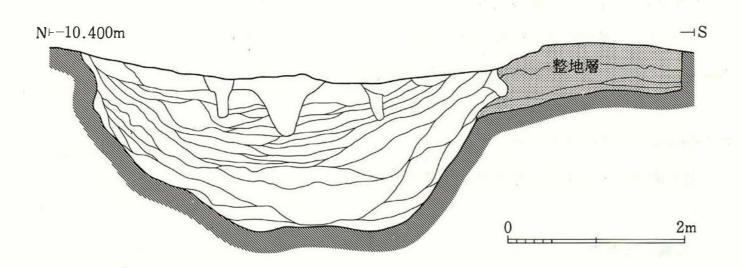
方形を呈する。壁はいずれも垂直気味に立ち上がり、壁面は赤化している。床面は黒色化して硬い。傾斜角度は焚口部よりそれぞれ  $8^\circ$ 、  $18^\circ$ 、  $12^\circ$  を計る。なお、 4 号木炭窯には周溝が巡っている。

〔焚口部〕 操業時で一番新しい4号窯についてみれば、炭化室より一段低いレベルにある。

〔前庭部〕 平面形は方形状を呈する。灰層が厚く堆積し、その上層には崩壊土、整地層がある。西側部分については削平で大きく削られている。壁は垂直気味に立ち上がり、床面より溝状の落ち込みが認められる。壁際には上屋を支えたと思われるピットがある。

〔中軸線の方向〕 3号木炭窯・ $S-52^\circ-E$ 、 4号木炭窯・ $N-90^\circ-E$ 、5号木炭窯・ $N-35^\circ-E$  〔付属施設〕 3号・5号木炭窯に取り付いている。平面形は方形状を呈している。いずれもトンネル状の穴が3号には2ケ所、5号には1ケ所認められる。壁は垂直気味に立ち上がり、床面は3号木炭窯についてはすり鉢状を呈するが、5号木炭窯は平坦面を呈する。

〔規模〕 3号木炭窯・奥行き7.5 m、幅1~1.35m(付属施設・奥行き3.8m、上幅1.1~1.73m)、4号木炭窯・奥行き4.2 m、幅1.2~1.4m、5号木炭窯・奥行き8.2 m以上、幅90cm(付属施設・奥行き5.7m、幅1.1~1.4)



第17図 3~5号木炭窯前庭部セクション図

#### 6号木炭窯

調査区西側丘陵部に位置する。削平のための炭化室及び前庭部は失われている。

〔炭化室〕 平面形は先端が丸みを持つ長方形を呈している。壁はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁面は赤化している。床面は平坦で黒色化して硬い。焚口部より北側に向いており、約16°の傾斜をもって立ち立がっている。

[焚口部] 床面がわずかに下がるだけである。炭化室との境はいくぶん狭くなっている。

〔前庭部〕 平面形は長方形を呈し、両隅は角張っている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はすり鉢状を呈する。

#### [中軸線の方向] N-11°-E

〔規模〕 炭化室は焚口部より奥壁まで4.05m、幅1.0~1.64m、前庭部は3.08m×0.48~1.47mを計る。

#### (3) 竪穴住居跡

#### SI 01竪穴住居跡

[位置・平面形・規模] 調査区東側の1号・2 号木炭窯が共有する作業場に隣接している。平面形 は、西壁の一部が削平のため失われているが、隅丸 方形を呈している。規模は、長辺4.4m×短辺3.5m である。

〔壁・床面・施設〕 壁はほぼ垂直に立ち上がり、0.11~0.4mを計る。床面は平坦面を呈し、カマド付近及び南側に焼土の分布が認められた。周溝は、幅0.12~0.49m、深さ4~20cmを計る。

〔カマド〕 東壁のやや南側に付設されている。 燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は床面とほぼ同一 のレベルである。煙道部は長さ約80cm、幅約30cm程 度で燃焼部より若干立ち上がっている。

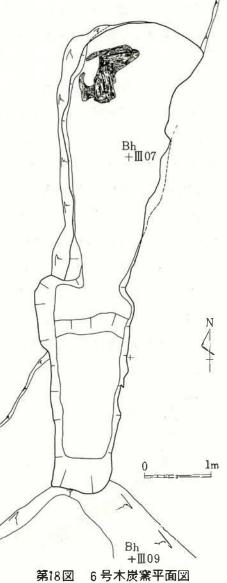
[出土遺物] わずかに埋土内より鉄滓が数点出 土したのみである。

#### SI03竪穴住居跡

[位置・平面形・規模] 6号木炭窯の東側に隣 第18図 6号木炭窯平面図接して検出した。隅丸状の長方形を呈し、長辺約3.5m、短辺約2.5mを計る。南東辺には、2本の溝状の張り出しが取り付く。

〔壁・床面・施設〕 壁は、床面からほぼ垂直に近く立ち上がり、5~40cmを計る。北東壁ほど保存が良い。床面はほぼ全面に貼り床をしているが、他は地山を床としている。住居のほぼ中央には、厚さ1~2 cmの細かい鉄滓の層が分布している。この層を除去したところ床面上で浅いピットが2基検出された。また、その東側には溝がつくられている。溝の中央には、直径30cm、深さ約20cmのピットが設けられている。

[カマド] カマドは北壁のほぼ中央に付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部 床面は若干窪んでおり、さほど火熱を受けた痕跡は認められない。煙道は長さ約90cmあり、深



さ約10cmを計る。

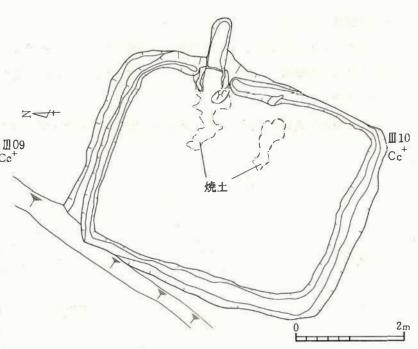
〔出土遺物〕 溝の 付属ピット、及び底面 から土師器甕2点、西 側壁近くには礫が並ん で検出された。その他 Cc+ に、鉄滓、鍛造剝片が ある。

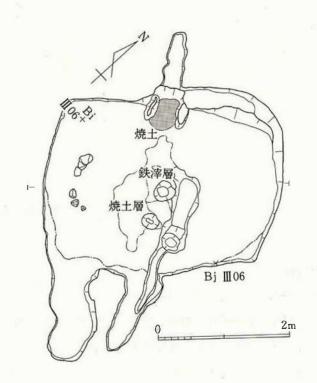
#### SI04竪穴住居跡

〔位置・平面形・規模〕 SI 03竪穴住居跡の東 側に隣接して検出した。 隅丸状の長方形を呈し、 長辺約5m、短辺約3.8 mを計る。

「壁・床面・施設〕壁は、東壁が比較的ゆるやかに立ち上がるが、他は床面からほぼ垂直に近く立ち上がる。を高は10~30cmある。床面は北東辺を除をはまずる。ピットは周までいる。ピットは周ましてが全周するものはない。

[周溝] 周溝はカマドを除く住居の壁にそって巡っている。幅15cm~35cm、深さ2~7cmを計る。また、南西隅



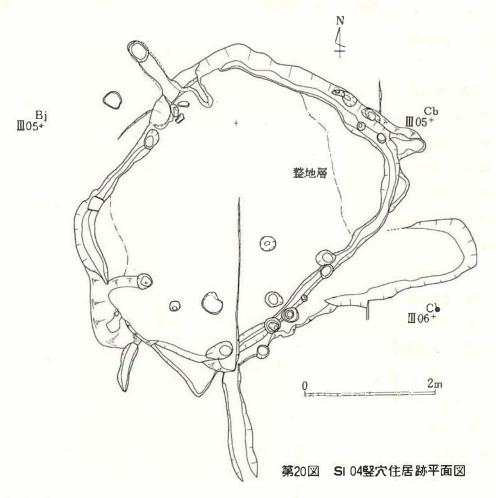


第19図 SI 01·03竪穴住居跡平面図

から住居外へと延びている。

[カマド] カマドは北壁のやや東寄りに付設されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部内からは須恵器甕破片、礫が検出された。煙道は基底幅約25cm、長さ1.1 m を計り、先端付近はピット状に窪んでいる。

[出土遺物] 遺物は床面上より土師器杯・甕、須恵器杯・甕、鉄滓、礫が出土している。



#### (4) 土 垃

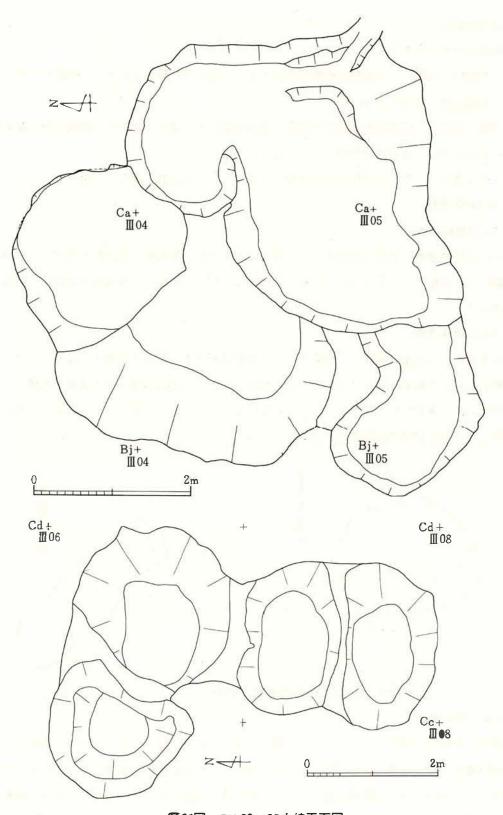
#### SK02土垃

調査区中央部平場の北西端に位置する。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈し、土拡状の掘り込みが5ケ所認められる。南東辺付近にはSD03(A溝跡が取り付く、規模は南北、東西とも約6 m で、深さは30cm~70cmを計る。

[壁・底面]壁は北辺付近が垂直に近く立ち上がるが、他は緩やかに傾斜する。底面から壁下半にかけては基本層位Ⅲ~Ⅳ層の粘土質シルトが露出している。

【出土遺物】床面上に堆積する黒色粘土層より土師器甕、須恵器甕、鉄滓、炉壁片が出土している。



第21図 SK 02·03土拡平面図

#### SK03土垃

調査区中央部平場の東側に位置する。

[平面形・規模] 平面形は不整形を呈するが、土城状の掘り込みが4ケ所認められる。規模は長辺5.6m、短辺2.25mを計る。

[壁・底面] 壁は底面よりゆるやかに立ち上がるすり鉢状を呈する。底面は粘土層である。 最も南側の土拡には砂鉄が堆積している箇所がある。

[出土遺物] 埋土の灰白色火山灰層の下層より、須恵器甕、礫などが出土している。

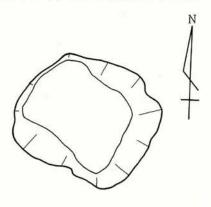
#### (5) 特殊遺構

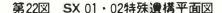
#### SX01特殊遺構

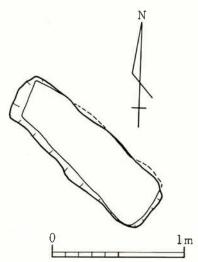
S X 04特殊遺構の東側に位置する。平面形は不整方形、断面形は逆台形を呈する。規模は、 長軸 1 m 、短軸90cm、深さ40cmを計る。底面上には約3 cmの厚さで木炭層が堆積し、壁面は赤 く焼けている。

#### SX02特殊遺構

SK01土拡の南東に隣接して位置する。平面形は長方形、壁はほぼ垂直に近く立ち上がる。 長軸1.35m、短軸45cm、深さ40cmを計る。底面上には6~15cmの厚さで木炭層が堆積し、その 上層ににぶい黄橙色粘土質シルトが貼られている。さらにその上層にも4cmの厚さで木炭層が 堆積している。壁はほぼ全面赤化し焼けている。





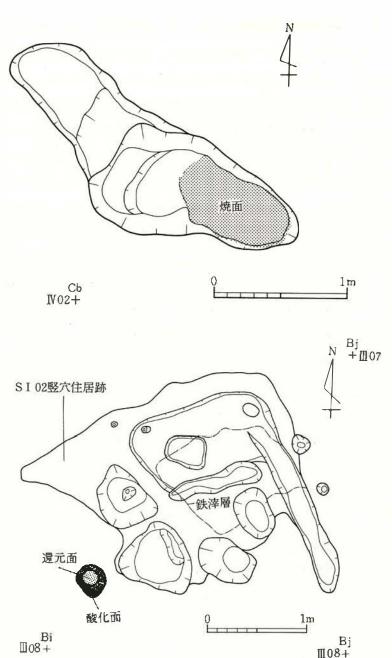


#### SX03特殊遺構

調査区東側の一段高いテラス状の小平場に位置し、SIO1竪穴住居跡の南側に隣接する。平面形は溝状を呈し長さ2.5m、幅0.5~0.9m、深さ10~20cmを計る。東端の奥まった部分が壁、床面とも0.9m×0.5mの範囲で焼けている。壁はほぼ垂直に近く立ち上がり、底面は西側に向かって傾斜している。遺物は土師器甕の破片が出土している。

#### SX04特殊遺構·SI02竪穴住居跡

S X 04特殊遺構は、S I 03竪穴 住居跡の南側に隣接して検出した 鍛治炉、ピット、竪穴状の窪み からなる鍛治工房跡である。SI 02竪穴住居跡と重複しておりこれ より新しい。竪穴状の窪みの形 態は、隅丸状長方形で南辺は溝に よって切られている。規模は長辺 1.4m、短辺0.8m(推定)、深さ3 ~5cmを計る。東辺には長さ1.8 m、幅25~30cm、深さ10~20cmの 溝が取り付いている。床面直上に は南辺をオーバーフローして鉄滓 層が2~3cmの厚さで堆積してい た。この鉄滓層中には多量の鍛造 剝片が含まれていた。また、北西 隅に羽口、北東隅には椀形滓が検 出された。この竪穴状の窪みの 西側には、ピット3基と、鍛治炉 が配置されている。ピットは径40 ~60cm、深さ20~40cmの不整円形 を呈する。鍛治炉は、残存状況が 悪く、還元面と酸化面のみが検出 された。還元面の幅は約15cm、酸化 面は還元面のまわりを10~20cmの



第23図 S X 03·04特殊遺構平面図

幅をもって巡っている。SI02竪穴住居跡は、約2.6m×約2.0mまで検出した。南・東辺は 削平されており遺存状況が悪い。西辺中央の壁ぎわ床面上で羽口が検出された。

#### **<発見遺物>**

今回、発見した遺物には土師器杯・甕、須恵器杯、蓋、甕、送風管、羽口、鉄滓、炉壁、砂 鉄、鉄塊、木炭、鍛造剝片などがある。

土師器:土師器は杯、甕が出土している。いずれもロクロ未使用のものである。杯は体部に

稜を持ち、下半部には軽いケズリが施されている。甕は底部から体部にかけてのものが出土している。底部には木葉痕があり、体部には刷毛目調整が施されている。

須恵器:須恵器は杯・蓋・甕が出土している。杯は、口縁部と底部破片が各1点ある。後者 の底部には回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ調整が施される。

送風管:送風管は推定内径12~15cm位の土管状を呈するもので、先端ほどラッパ状に開く特徴を持っている。ほとんどが破片となって各炉の廃滓場から多く出土している。管外面にはラッパ状に開く先端部を残してノロが付着している。内面は布目圧痕のあるものと、ないものがあり、後者はナデ調整が施してある。胎土は石英を多く含むもので、質が悪い。また、粘土積み上げ痕のわかるものもある。内面に布目圧痕のあるものが出土量の大半を占めている。

羽口:羽口は2号製鉄炉廃滓場から2点、SI 02竪穴住居跡、S X D4特殊遺構から各1点ずつ出土している。これらは内径3 cm前後を計るが、廃滓場出土のものが厚手である。第25図5は全体の形態がわかるものである。吸気部は内弯ぎみに開き、先端部にはノロが付着している。

鉄滓:鉄滓は各炉の作業場、廃滓場に0.5~1mの厚さで堆積している。これまでのところ総量で約15トン出土している。鉄滓は炉内残留滓、流出滓、炉底滓に分けられ、炉内残留滓が量的には大半を占めている。また、SI 03竪穴住居跡、SX 04特殊遺構からも出土しているが2~3 cm大のものと粒状のものが多い。粒状のものは磁着度が高い特徴をもっている。

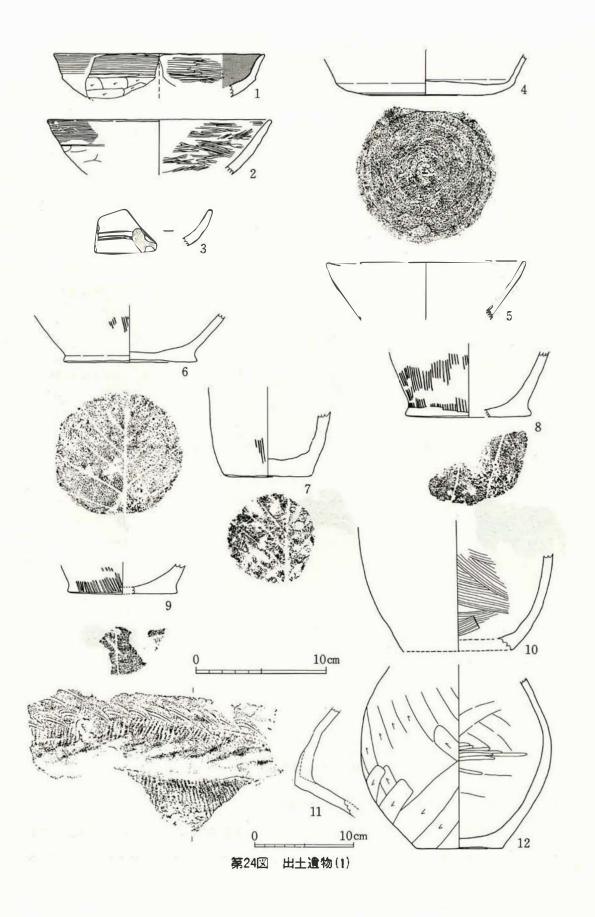
炉壁: 炉壁は各炉の廃滓場から主に出土している。いずれも破片であるが、比較的残りの良いものなどには粘土積み上げ痕が認められる。

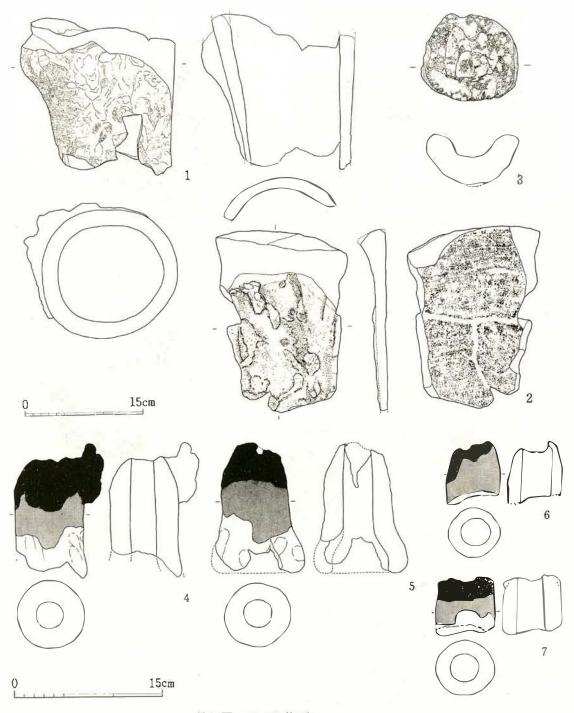
砂鉄:砂鉄は1・3号製鉄炉の作業場・廃滓場の堆積土中からまとまって出土している。その他、SK03土城底面にも張り付くような状態で検出された。

木炭:木炭は1号木炭窯炭化室の焚口部付近と、6号木炭窯の炭化室奥壁近くに残存していた。 鍛造制片(ハンマースケール):鍛造制片はSI 03竪穴住居跡、SX 04特殊遺構の鉄滓層中 から検出している。量的には後者が非常に多く、前者は少ない。大きさは2~3mm大で断面が 鋭利で扁平なものとボール状を呈するものがある

### <まとめ>

- 1. 調査で発見した製鉄関連遺構は、製鉄炉4基、木炭窯6基、竪穴住居跡4軒、特殊遺構4 基、土城3基、溝跡3条である。
- 2. 製鉄炉は、半地下式竪型炉の構造をもつ、炉は一般に炉前がこわれているものであるが、 本例は炉壁がほとんど残存しており、保存状態は極めて良好である。
- 3. 本遺跡の炉の構造は、炉背上部のテラスに共通した特徴をもつ。それは炉の延長中軸線上 を高めに残し、その両側に一辺約1mの方形の土城をつくり、さらにその上部には一段高く





第25図 出土遺物(2)

テラスを作り出してこれらを囲むように溝を配している点である。

4. 従来、送風施設については不明な点が多かったが、本調査によって炉背部に貫通孔が認め られ、さらに送風管が炉内に、炉壁を不着したままずり落ちた状態で発見されたことなどか

Na	遺構名	出土層位	種類	器形	外 面 調 整	内面調整	口径	庭径	器高
1	Si-04	£ -5	土師器	杯	ヨコナデ→綾上部ヘラミガキ、体部−手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→ 無色処理	(16.1)	<del>=</del>	( 3.3)
2	SI-04	贴床	土師器	杯	ョコナデ→一部へ ラミガキ、沈線、体部−手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	(17.1)	100	( 4.2
3	SK-01	埋土	土師器	杯	ヨコナデ 体部一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→ 黒色処理	-	-	=
4	SI-04	2 - 4	須恵器	杯	ロクロ調整 底部 回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ	ロクロ調整→ 軽いナデ	-:	10.8	( 3.0)
5	1号製鉄炉 廃滓場	2-5	須恵器	杯	ロクロ調整 スサ入粘土付着	ロクロ調整 スサ入粘土付着	(15.2)		( 4.1)
6	SX-04Pitl	3 層	土師器	麥	体部・ハケメ→ヘラナデ (器面やや摩滅) 底部木葉痕	摩滅の為に不明	-	10.2	( 3.4)
7	SK-02	床面土	土師器	斐	体部・ハケメ→ ヘラナデ(器面やや審滅)底部木菱痕	ナデ、内面に粘土 紐巻き上げ浜	1-1	6-8	( 6.8)
8	3号製鉄炉 作業場	整地層	土師器	麥	体部ハケメ 底部 木葉痕	ナデ	=	( 9.6)	( 5.0)
9	3 号製鉄炉 周溝	埋 土	土師器	麥	体部ハケメ 底部 木葉痕		F1==35	(8.4)	( 2.3)
10	3号木炭窯 付属作業場	埋土上層	土師器	麥	摩滅の為に不明	ヘラナデ	( <del></del> 2)	(8.3)	( 9.6)
11	3号製鉄炉 麂滓場	£ -1	須恵器	变	ナデ→波状沈線(8条)頸部~肩部、平行叩き目→指ナデ	横方向のナデ	:-::	3 <del>-</del> -4	(10.6)
12	SI-03	床面上	土師器	麥	体部手持ちヘラケズリ 底部ケズリ→ヘラナデ	ヘラナデ→ 部分的にヘ ラミガキ	l <del>es</del> a	6.6	(13.9)
No	遺構名	出土層位	種類	器形	外面 調整	内面調整	外径	内径	残存员
1	3号製鉄炉	炉内	土製品	送風管	ナデ、内外面とも酸化、ノロ付着	ナデ	17.1	13.5	19.3
2	3号製鉄炉 廃滓場	<b>ℓ</b> − 1	土製品	送風管	ナデ、内外面とも酸化、ノロ付着	布目圧痕	(18.0)	(15)	23.0
3	SX-04	床面上		梳型滓			11~12.3	6.5~19	6.6
4	2 号製鉄炉 廃滓場	é - 6	土製品	羽口	夫蟾にノロ、 <b>一部酸化</b> している、下部に指わさえ痕		6.8	2.8	12.2
5	2 号製鉄炉 廃滓場	é - 6	土製品	羽口	夫端にノロ、部 酸化している。下部に指おさえ痕		6.8	3.0	13.1
6.	SI-02	£ -3	土製品	羽口	先端に溶けた鉄付着(ノロ)―部酸化している。		5,0~5.3	2.9	5.5
7	SX-04	床面上	土製品	羽口	先端に溶けた鉄付着(ノロ)一部酸化している。		5.6~6.0	2.8	5.7

出土遺物(1)・(2)観察表

- ら、炉背部分から送風していたことが確実となった。よって炉背上部の施設は送風施設と考えられる。
- 5. 木炭窯は、地下式の構造を取り、形態分類から①前庭部を共有し、窯体が丘陵尾根線に対して平行につくられるもの(1号・2号木炭窯)②前庭部を共有し、丘陵尾根線に対して窯体がやや直交してつくられるもの(3号・4号・5号木炭窯)③単独で存在し、丘陵尾根線に対して平行につくられるもの(6号木炭窯)の3形態が存在する。
- 6. 1号、2号、3号、5号には、付属施設を有する。形態は先端部が溝状に細長くすぼまり 窯体接合部分は円筒状を呈する。連結部位は窯体の中央部より上部に位置し、1ケ及び2ケ のトンネル状の窓がついている。
- 7. 窯体内部は炭化室が細長く、傾斜がきつい特徴をもっている。

- 8. 竪穴住居跡 (SI 02・03) からは羽口、銀造剝片、細鉄滓集積層を検出している。これらの出土遺物より本住居跡は銀治工房跡と考えられる。またSX 04特殊遺構では、銀治炉が単独で存在しそれに付属する作業場(ピット竪穴状の窪み)を検出した。
- 9. S X 01~03特殊遺構は壁面の酸化、底面上木炭層のあり方から、焼成遺構と考えられる。 S K 02・03土拡は、円形あるいは楕円形の土城群が複合したもので、底面は黄色粘土層まで 到達している。これらの土城群はこの粘土を採掘するために掘られたものであろう。
- 10. 製鉄遺構の年代については遺構内から出土した土器を検討することにする。土器は土師器杯・甕と須恵器甕が出土している。土師器は全てロクロ未使用のもので、杯には国分寺下層式に比定できるものがある。また甕の口縁部には頸部に軽い段をもつものや、底部に木葉痕をもつものがある。また須恵器では甕の口縁部に波状の櫛目模様があるものや、底部が回転へラ切り後回転ヘラケズリ調整を施す杯が出土している。これらは総じて8世紀代の遺物であり、製鉄炉の中で最新の3号炉からも9世紀以降に下る遺物は出土していない。以上のことから、本製鉄遺構は8世紀-奈良時代-におさまるものと考えられる。

#### <参考・引用文献>

#### (B地区)

鎌田俊昭 「宮城県における旧石器時代前・中期の諸問題」『旧石器考古学34号』P. 25~46 (1987)

北村信・石井武政・寒川旭・中川久夫 『仙台地域の地質』地質調査所 1986

石器文化談話会編 『座散乱木遺跡発掘調査報告書皿』 石器文化談話会誌第3集 (1983)

多賀城市·多賀城市教育委員会『志引遺跡発掘調査報告書』(1984)

東北歴史資料館・石器文化談話会 『馬場壇A遺跡I-前期旧石器時代の研究-』 (1986)

中川久夫 「本邦太平洋没岸地方における海水準静的変化と第四紀編年」『地質学古生物学教室研究邦文報告54』P.1~6 (1961)

#### (A地区)

飯島武治・穴沢義功 「群馬県太田市菅ノ沢製鉄遺構」考古学雑読55-2 (1969)

菅原俊行他「坂ノ上E 遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 秋田市教育委員会(1984) 郷掘英司・田井知二他 「花前Ⅱ - 1・花前Ⅲ - 2・矢船」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』千葉県 文化財センター (1985)

雄山閣 「古代日本の鉄を科学する」『季刊考古学第8号』 (1984)

(財)福島県文化センター 「相馬開発と遺跡ー相馬開発関連遺跡調査概報一」「福島県文化財調査報告書第 151集』(1985)

(財)福島県文化センター 「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅱ」 「福島県文化調査報告書第166集」(1986)

(財)福島県文化センター 「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅲ」『福島文化財調査報告書第179集』(1987)

(財)千葉県文化財センター 「研究紀要7」 (1983)

たたら研究会 「日本古代の鉄生産」 「1987年度 たたら研究会大会資料」 (1987)

東京工業大学製鉄史研究会 「古代日本の鉄と社会」平凡社選書78 (1983)

窪田蔵郎 「製鉄遺跡」ニューサイエンス社(1983)

高橋一夫 「古代の製鉄」『採鉱と冶金』日本評論社(1983)

土佐雅彦 「日本古代製鉄遺跡に関する研究序説-とくに炉形を中心に」『たたら研究第24号』(1981)

関 清 「富山県における古代製鉄炉」『大境第8号』富山県考古学会 (1984)

関 清 「製鉄用炭窪とその意義」『大境第9号』 富山県考古学会 (1985)

宮城県教育委員会 「硯沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書第116集』 (1987)

埼玉県教育委員会「大山」「埼玉県遺跡調査報告書第23集」 (1979年)

# 炉材粘土他耐火度測定報告

川鉄テクノリサーチ株式会社 総合検査・分析センター 総 括 技 術 室

#### 1. 試 料

試料Na	遺 構 層 位	遺 物
1	S X 04特殊遺構	羽 口
2	基本層位第Ⅲ層	土 壌
3	1号製鉄炉	送 風 管
4	• •	炉材粘土
5	3 号製鉄炉	"

#### 2. 試験方法

JIS R2204「耐火れんがの耐火度の試験方法」による。

#### 3. 試験結果

試料Na	耐火度(SK)	色	試験錐の状態
1	5a -	茶黄	膨張、 ——
2	16+	黄灰	膨張、錐面アバタ状
3	8	茶黄	膨張、錐面アバタ状
4	05a+	茶	膨張、 ———
5	0 5a	茶	膨張、錐面アバタ状

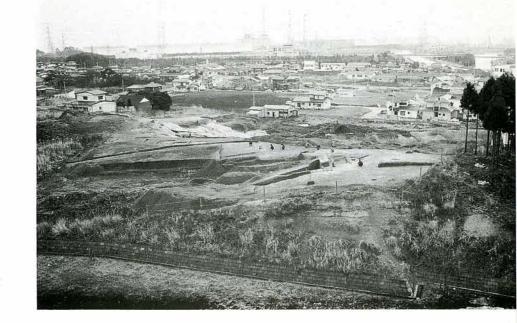
注)耐火度と温度との関係は別紙の「ゼーゲル及びオルトンコーン温度比較表」をご参照下さい。

ゼーゲル及びオルトンコーン温度比較表

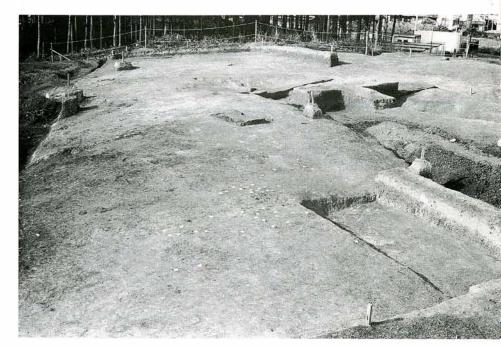
	ゼーゲル	、コーン	コーン	オルトン、	、コーン	ゼーゲル、	コーン	コーン	オルトン	、コーン
	華氏	摄 氏	番号	摄 氏	華氏	華氏	摄 氏	番号	摄 氏	華氏
Ī	1112	600	022	605	1121			3	1170	2138
ı	1202	650	021	615	1139	2120	1160	4a		
1	1238	670	020	650	1202			4	1190	2174
1	1274	690	019	660	1220	2156	1180	5a		
1	1310	710	018	720	1328			5	1205	2201
	1346	730	017	770	1418	2196	1200	6a		
ı	1382	750	016	796	1463			6	1230	2246
1	1454	790	015a			2246	1230	7	1250	2282
ı			015	805	1481	2282	1250	8	1260	2300
ı	1490	815	014a			2336	1280	9	1285	2345
1			014	830	1526	2372	1300	10	1305	2381
ı	1535	835	013a			2408	1320	11	1325	2417
ı			013	860	1580	2462	1350	12	1337	2439
1	1571	855	012a	- 74		2516	1380	13	1349	2460
1			012	875	1607	2570	1410	14	1398	2548
1	1616	880	011a			2615	1435	15	1430	2606
			011	895	1643	2660	1460	16	1491	2716
	1652	900	010a			2696	1480	17	1512	2754
			010	905	1661	2732	1500	18	1522	2772
	1688	920	09a			2768	1520	19	1541	2806
		7	09	930	1706	2786	1530	20	1564	2847
ı	1724	940	08a					23	1605	2921
			08	950	1742	2876	1580	26	1621	2950
	1760	960	07a			2930	1610	27	1640	2984
			07	990	1814	2966	1630	28	1646	2995
	1796	980	06a			3002	1650	29	1659	3018
			06	1015	1859	3038	1670	30	1665	3029
	1832	1000	05a			3074	1690	31	1683	3061
1			05	1040	1904			311/2	1699	3090
	1868	1020	04a			3110	1710	32	1717	3123
		χ.	04	1060	1940			321/2	1724	3135
	1904	1040	03a			3146	1730	33	1743	3169
			03	1115	2039	3182	1750	34	1763	3205
	1940	1060	02a			3218	1770	35	1785	3245
			02	1125	2057	3254	1790	36	1804	3279
	1976	1080	01a			3317	1825	37	1820	3308
			01	1145	2093	3362	1850	38	1835	3335
	2012	1100	1a			3416	1880	39	1865	3389
			1	1160	2120	3488	1920	40	1885	3425
	2048	1120	2a			3560	1960	41	1970	3578
			2	1165	2129	3632	2000	42	2015	3659
	2084	1140	3a							

注:コーンでは正確な温度の測定はできない。耐火度の数値を概略の温度で**示**す場合にの み上表の温度が使われる。

オルトンコーンはA.S.T.M.によって認定されており、J. Amer. Cer. Soc. 9. 701-43, 1926に記載せられている Fairchild と Peters の試験を基としている。 本表の温度は一般の焼成および耐火材料の使用の際におけるような緩かな加熱速度には適用できない。



B地区図版 1 調査区遠景(北から)



B地区図版2 調査区近景(東から) (白紙は石器出土地点)



B地区図版3 調査区近景(西から)



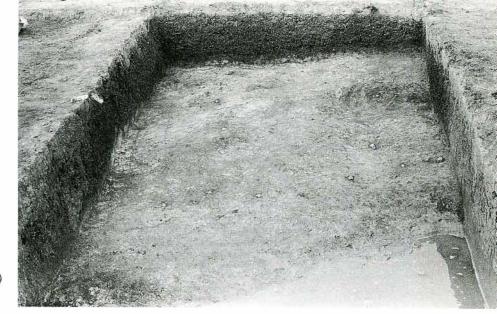
B地区図版4 発掘風景 第2石器集中地点 (南から) ディレビャンコ博士ら (ソビエト)



B 地区図版5 B I -g ライン谷頭 地層断面(東壁)



B 地区図版 6 B I ーh ライン地層 断面(東壁)



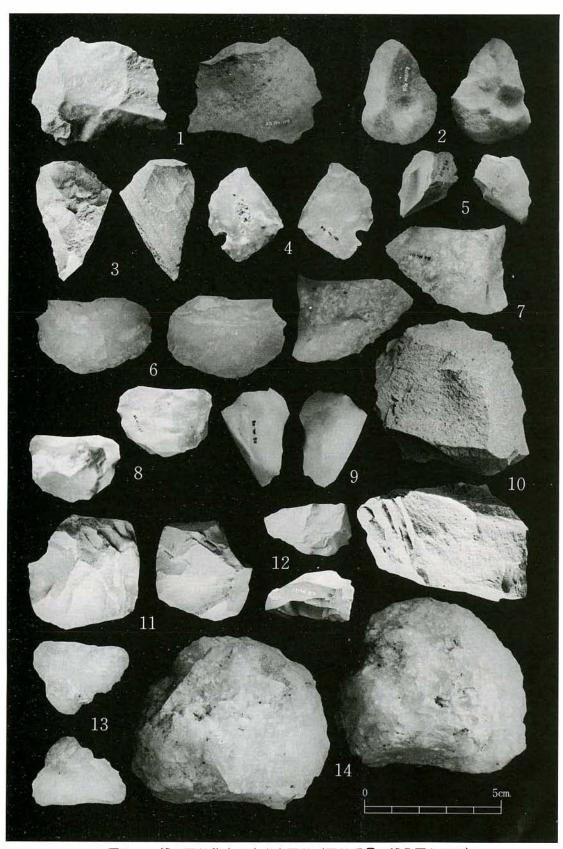
B地区図版7 第1石器集中地点 (南から)



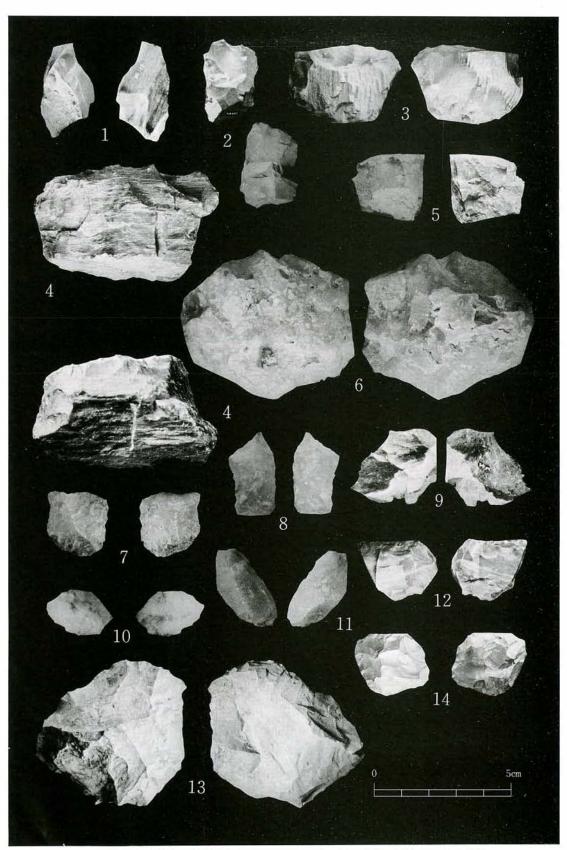
B 地区図版8 第4石器集中地点 (西から)



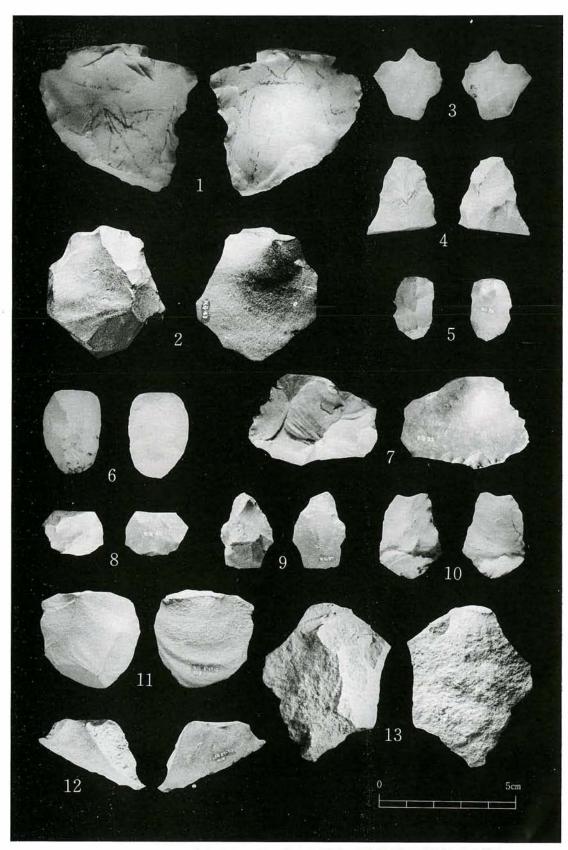
B地区図版9 第5石器集中地点 (西から)



図版10 第1石器集中地点出土石器(石器番号は第5図と同じ)



図版11 第2・3石器集中地点出土石器(石器番号は第6図と同じ)



図版12 第4・5石器集中地点、その他出土石器(石器番号は第7図と同じ)



A 地区図版1 調査区全景(南より)



A地区図版2 調査区全景(西より)



A地区図版3 調査区航空写真(南より)



A地区図版4 1・2・3号製鉄炉全景(南より)



図版5 1号製鉄炉全景(南より)



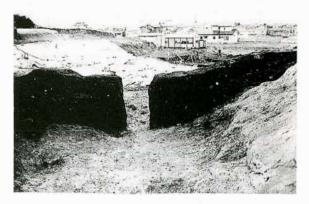
図版7 2号製鉄炉本体検出状況(南より)



図版8 4号製鉄炉(西より)



図版6 1号製鉄炉本体(南より)



図版9 1号製鉄炉作業場土層堆積状況(北より)



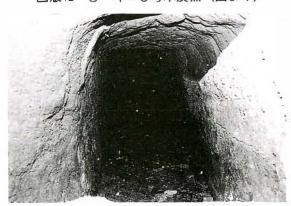
図版10 3号製鉄炉全景(南より)



図版11 3号製鉄炉内送風管検出状況



図版12 3・4・5号木炭窯(西より)



図版13 5号木炭窯炭化室(南より)



図版14 5号木炭窯煙出し孔(北西より)



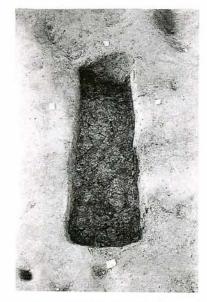
図版15 SX01特殊遺構(南より)



図版16 6号木炭窯(南より)



図版17 6号木炭窯炭化材検出状況(南より)



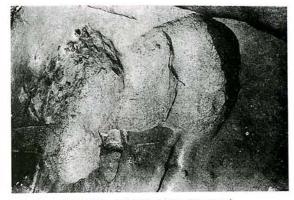
図版18 SX02特殊遺構(西より)



図版19 調査区平場全景(北より)



図版20 SI04竪穴住宅跡(南東より)



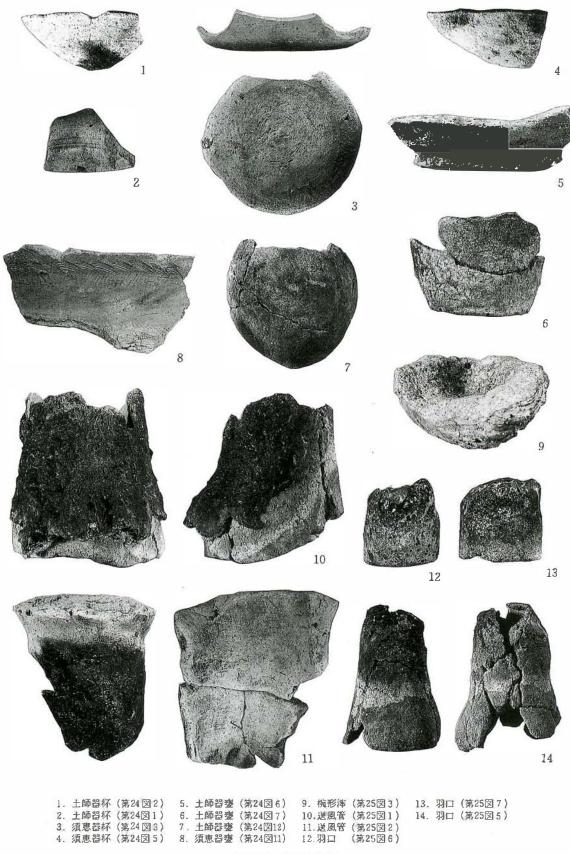
図版22 SK03土址(西より)



図版21 SK02土拡(北東より)



図版23 SX04特殊遺構·SI02竪穴住居跡羽口出土状況



図版24 出土遺物

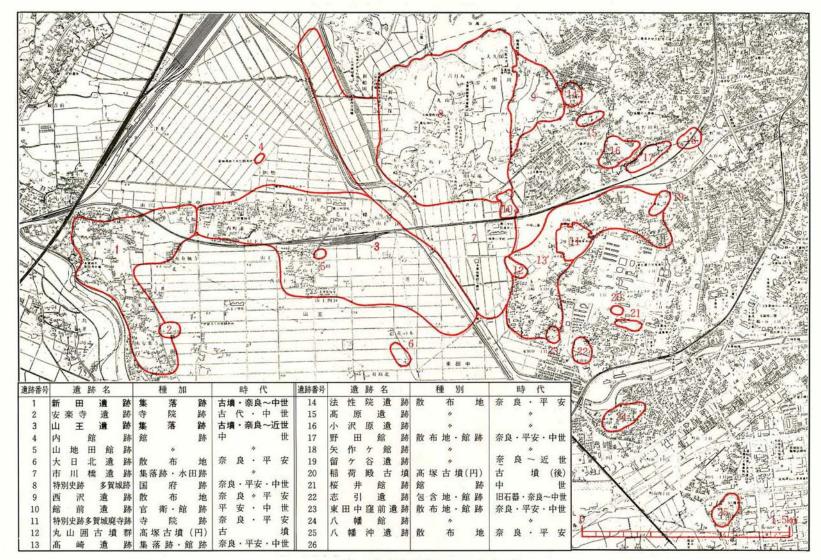


図2 多賀城市遺跡分布図 (西部)

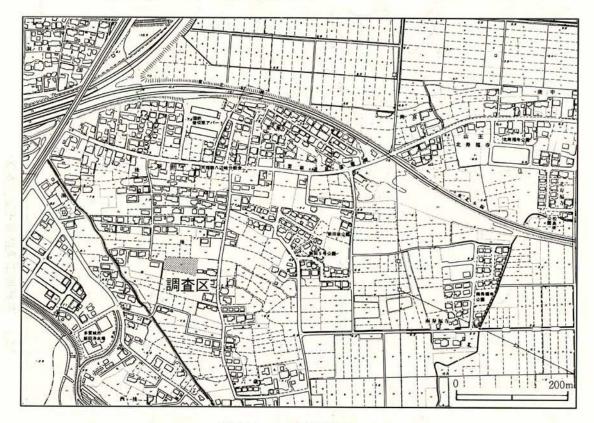
# Ⅱ 新田遺跡(後地区)

## 1. 調查要項

〇所 在 地:多賀城市新田字後111-1外2筆

〇調査期間:昭和63年1月25日~2月2日

〇調査面積: 226m2 (対象面積2,551 mi)



第1図 調査区位置図

## 2. 遺跡の立地

新田遺跡は、多賀城市の西端部に所在する遺跡である。

多賀城市は、市内をほぼ二分して流れる砂押川によって、東部・北部の丘陵部と、南部・西部に広がる平野部とに大きく区分されている。この平野部は、地理的には広義の仙台平野に含められるもので、新田遺跡はその最北端の一角に位置している。本遺跡は、七北田川によって形成された自然提防上に立地しており、海抜7~8mを計る。

今回調査を実施した地点は、本遺跡の北西端にあたる後地区の一部で、西方約200 m で七北田川に達する。現況では畑地となっており、土器の散布が見られる。

昭和39年7月、今回の調査地点より西方約150mの畑地から多量の土器が出土し、氏家和典

氏によって調査が行われている。遺構に関しては詳細が不明だが、「遺物の包含層は上下二層あり、上層は一五糎の灰黒色土で、氏家氏編年の第五型式(栗囲式)土師器が検出され、下層は三〇糎ほどの厚い黒色土で古式の土師器(塩釜式・南小泉式=註筆者)がふくまれていた」という(註1)。また、昭和56年8月には、東方約150mの畑地において、多賀城市教育委員会による新田遺跡第1次調査が行われている。奈良・平安時代の掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝跡、中世の掘立柱建物跡・井戸跡などが発見されている(註2)。

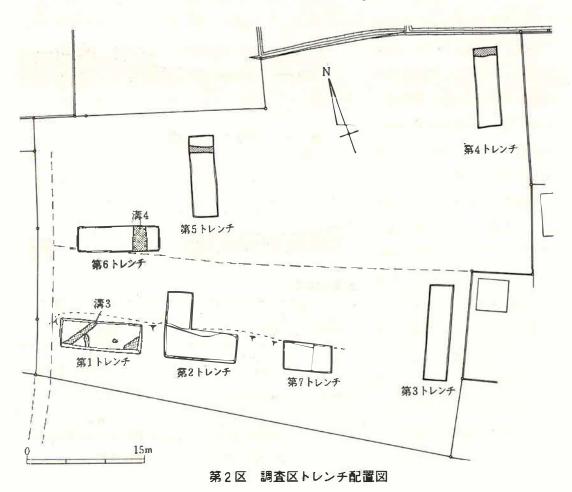
#### 3. 調查成果

まず層序についてみると、大部分は表土下に暗褐色の砂質土(第 [ 層 ) があり、その下はすぐ地山である砂層となっている。第 [ 層は古代から中世までの遺物を包含するが、近世以降の陶磁器も混在している。地山の砂層としたものは周辺地域一帯の基盤となっているものである。尚、第 1 トレンチより東側一帯は、現地表より 110 cmの深さまで撹乱されている。

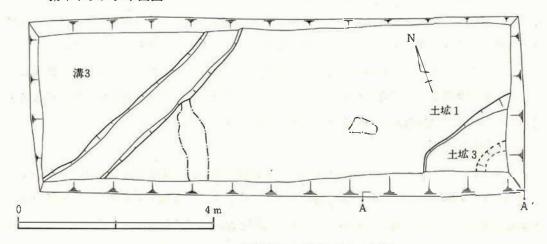
次に発見した遺構と遺物について簡単に説明を加える。

#### (1) 遺橫

遺構を発見できたのは第1と第6の2本のトレンチである。



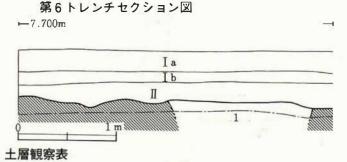
第1トレンチ平面図



〔第1トレンチ〕 溝跡2条、 土城 4 基を発見した。残存状況 は良くない。溝3は幅25~65cm を計る溝跡で、約5mにわたっ て検出した。壁はわずかに12cm を残すのみであり、埋土は灰黄 褐色の砂質土である。遺物は、 灰釉を施した中世瀬戸窯の鉢や 須恵器・赤焼き土器の小片が出 土している。土拡1~4につい ては調査不十分であるが、土坑 2・4は埋土中に炭化物や焼土 粒を多く含んでいる状況を確認 している。遺物は非ロクロ調整 の土師器が出土している。

[第6トレンチ] 溝跡1条を発見した。この溝4は平面でプランを確認しただけであるが幅約1.5mを計り南北方向に走っている。埋土は黒褐色の砂質土を主体とし、地山の砂をプロック

第1トレンチセクション図 A'r-7.800m ーA Ia 監土



	層位	土色	備考
第1	トレン・	<i>f</i>	
堆積層	Ia	褐色(10Y R %)	麦土·耕作土
土址1	1	にぶい黄橙色(10Y R %)	砂質 浅黄色土をプロック状に含む
土城 2	2	庆黄色(2.5Y %)	<ul><li>焼土や炭化物を多く含む</li></ul>
土坻 3	3	浸黄色(5 Y %)	<ul><li>によい黄褐色粘質土粒を含む</li></ul>
第6	トレンナ	+	
堆積層	Ia	褐色(10Y R 火)	表土・耕作土
	Iь	→ (10Y R %)	"
*	П	暗褐色(10Y R 为)	耕作土 遺物を含む
溝 4	1	無褐色(10Y R ¾)	砂質 地山ブロック粒を含む

第3図 第1・6トレンチ実測図

状に含んでいる。また、この遺跡の西側では、地山上で黒色土の堆積がみられる。遺構か包含層か判断できなかったが赤焼き土器や土師器の杯が出土している。

#### (2) 遺物

土師器、須恵器、赤焼き土器、カワラケ、中世陶器などが平箱で2箱ほど出土している。特に第3トレンチの第Ⅱ層からの出土が多い。土師器は最も多く出土しており、ロクロ調整を行っているものといないものとがあり、後者の中には古墳時代に属するものも多く見られる。

## 4. まとめ

- 1. 遺構としては溝、土城などを発見した。この内、溝3は中世以降に属すると考えられる。
- 2. 遺構は調査区西半部でのみ検出しているが、第3トレンチにおける土器出土状況をみると、 東半部にも遺構の存在が予想される。
- 3. 遺物は古墳時代から中世にかけてのものが出土している。近接する西後地区や第1次調査 の成果を考え併せると、各時代の遺構が複合していると考えられる。
  - 註1 阿部義平「宮城県新田遺跡出土の土師器」 『考古学雑誌』1968
  - 註2 多賀城市教育委員会「年報1」1987

< 新田遺跡、山王遺跡 引用・参考文献>

多賀城市史編纂委員会「多賀城」多賀城市史編纂報告書第1集 (1980)

多賀城市教育委員会「山王遺跡」多賀城市文化財調査報告書第9集(1986)

多賀城市教育委員会「年報1」多賀城市文化財調査報告書第14集 (1987)

白鳥良一 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』。宮城県多賀城跡調査研究所(1980)

仙台市教育委員会「年報1」仙台市文化財調查報告書第23集(1980)

仙台市教育委員会「年報2」仙台市文化財調査報告書第23集(1981)

仙台市教育委員会「年報3」仙台市文化財調查報告書第41集 (1982)

福島県教育委員会、財団法人福島県文化センター「母畑地区遺跡分布調査報告11」

福島県文化財調査報告第173集(1987)

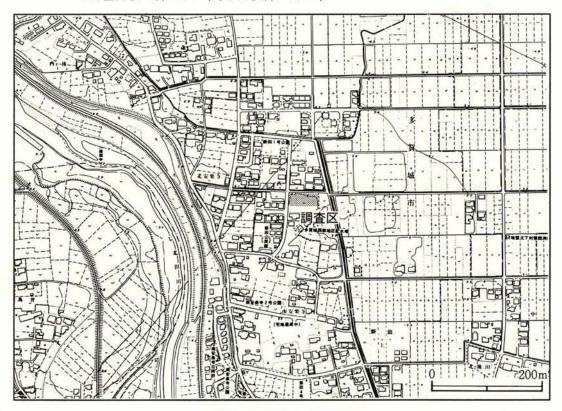
# Ⅲ 新田遺跡(西地区)

## 1. 調查要項

〇所 在 地:多賀城市新田字西39-1、39-2

〇調査期間:昭和62年11月12日~19日

〇調査面積:約120m (対象面積約1,100m²)



第1図 調査区位置図

# 2. 遺跡の立地

本遺跡は、七北田川東岸の自然提防上に立地する古墳時代から中世にかけての集落跡である。 同様の性格を有する遺跡としては、東側に隣接して山王遺跡があり、また七北田川の対岸には 鴻ノ巣遺跡が所在している。

## 3. 調査経過

本遺跡周辺は、仙台市と境を接する地理的条件のため、近年宅地造成が急増している状況にある。本遺跡の北半部では特にその傾向が著しく、市教育委員会ではこれに対応して昭和56年以降継続的に発掘調査を実施してきている。その結果、中世を中心とする数多くの遺構・遺物が発見され、その内容が次第に明らかになりつつある。これに対して遺跡の南半部では、遺物

の散布はみられるものの、過去3度の試掘調査では遺構は確認されていない。今回の調査区は、 遺跡の北端を東西に走る県道泉〜塩釜線の南側約600mに位置し、遺構が濃密に分布する地域 からやや外れた場所に位置する。

本調査については、昭和62年10月に地権者より宅地造成工事の計画が提示されたため、これ について協議を行い、同年11月に試掘調査を実施するに至ったものである。

調査は、当該地に3×10mのトレンチを南北方向に3本設定して行った。トレンチは西側から順に第1~3の番号をつけ、状況に応じて順次拡張を行った。

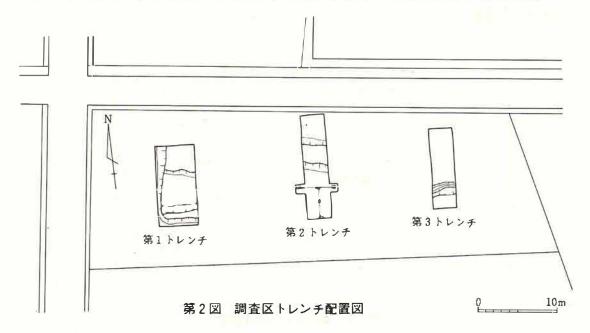
## 4. 調查成果

調査区内の基本層位は、第 I 層暗褐色シルト(耕作土)、第 II 層黄褐色砂質シルト、第 II 層 黄褐色シルトであり、その下層が地山のにぶい黄褐色砂質シルトとなる。このうち、第 II 層は 厚さ10~15cmで、調査区南半部にその分布が限られている。第 III 層は 4 層に細分でき、厚さ30~40cmで調査区全体に分布している。

検出遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、溝状遺構2条である。

SB01掘立柱建物跡、第2トレンチ第Ⅲ層上面で検出している。後述するSD01溝跡と同一面からの掘り込みである。東西2間、南北2間を確認しただけで全容をつかむまでには至っていない。柱間隔は1.65mから2.3mの範囲で、各柱穴間にばらつきがみられる。柱穴掘り方の大きさも30~60cmと一定ではなく、平面形も不整形である。遺物は出土していない。

SD01溝跡 第1トレンチ第Ⅲ層上面で検出している。大半がトレンチ外にかかるため、全体の規模、形態などは不明である。トレンチ南西部で「L」字状に屈曲しており、さらに北側と東側に延びると思われるが、他のトレンチでは確認されていない。遺物は近代以降のものと



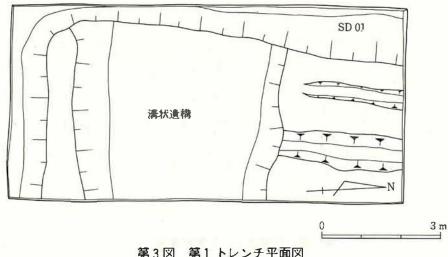
みられる陶磁器が出土している。

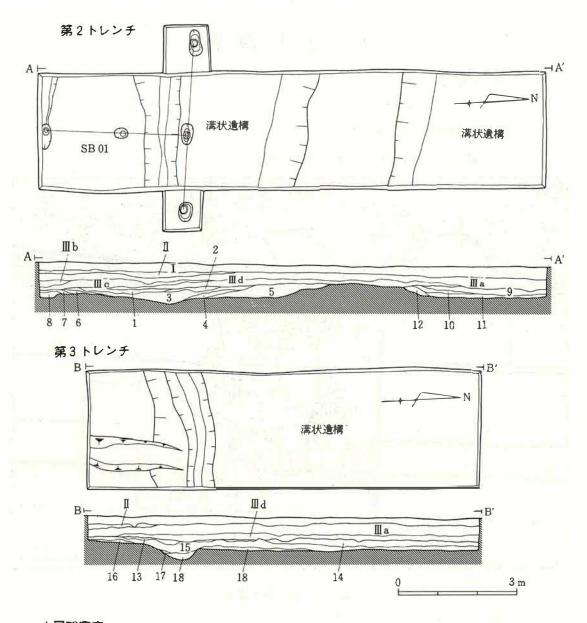
溝状遺構 すべてのトレンチの地山上で検出した東西方向に延びる遺構である。第2トレン チでは、約2.2mの間隔で南北2箇所で検出した。このうち北側の遺構については、その延び は不明であるが、南側の遺構は、第1・3トレンチ検出のものと一続きになると思われる。幅 は第1トレンチで約5m、第3トレンチでは8m以上を計るなど―定しておらず、かなり出入 りの激しい平面形をもつと思われる。深さは15~30cmで、幅に比較すると非常に浅く、底面は 中央付近でやや深さを増すもののほぼ平担面を呈する。なお、第3トレンチの南壁際では壁に 沿って幅70~90cmの小溝状のくぼみが走っているが、他のトレンチではこの延長は確認されて いない。埋土は黒褐色シルト及びそれに近い黄灰色シルトからなり、酸化鉄斑や植物遺体など は含まない。また堆積のあり方から自然埋没と考えられる。遺物は、土師器、須恵器杯・甕、 赤焼き土器がわずかに出土している。

出土遺物については、前述したように遺構に伴なう遺物は僅少で、器形の特徴や年代がわか るものはほとんどない。堆積土出土の遺物も、第Ⅲ層中から土師器、須恵器、赤焼き土器、中 世陶器が出土しているが、いずれも小破片で図示できるものはない。

#### まとめ 5.

- 今回の調査における検出遺構のうち、S D 01溝跡は出土遺物から近代以降のものと考えられ る。また、SB01建物跡については、これに伴なう遺物がないことから年代を明確にすること はできない。しかし、S D 01溝跡と同じ面の確認であることや、掘り込み面である第Ⅲ層中か ら中世陶器が出土していることもあり、大きく近世以降のものと考えておきたい。なお、溝状 遺構の性格及び年代については、今回の調査範囲だけでは言及することはむずかしく、不明と 言わざるを得ない。





土層観察表

層位	土 色	備考	層位	土 色	<b>縮</b> 考
基本	<b>上層位</b>		6	にぶい黄褐色(10Y R ½)	砂質
I	暗褐色(10Y R%)	耕作土	7	黄褐色(2.5Y%)	*
I	黄褐色(2.5Y%)	砂質	8	暗灰黄色(2.5Y%)	*
Шв	(2.5Y ½)	黄褐色砂質土を斑状に含む	9	黄灰色(2.5Y%)	黄褐色砂質土を斑状に若干含む
₫ъ	2 (2.5Y ¾)	砂質	10	暗灰黄色(2.5Y%)	*
■c	オリーブ褐色(2.5Y%)		11	黑褐色(2.5Y%)	*
Dd	暗灰黄褐色(2.5Y%)	黄褐色砂質土を混入	12	暗灰黄色(2.5Y%)	*
溝も	<b>犬遺構埋土</b>	-	13	黄褐色(2.5Y%)	砂質
1	暗オリーブ褐色(2.5Y外)		14	暗灰黄色(2.5Y%)	粘性あり
2	にぶい黄色(2.5Y%)	砂質 暗オリーブ褐色土を混入	15	黑褐色(2.5Y%)	+
3	黄灰色(2.5Y%)	黄褐色砂質土を斑状に含む	16	オリーブ褐色(2.5Y%)	砂質 暗灰黄色土を混入
4	によい黄褐色(10YR%)	砂質	17	によい黄褐色(10Y R %)	
5	黑褐色(2.5Y光)	によい黄褐色砂質土を斑状に含む	18	灰黄褐色(10Y R ½)	やや砂質

第4図 第2・3トレンチ実測図

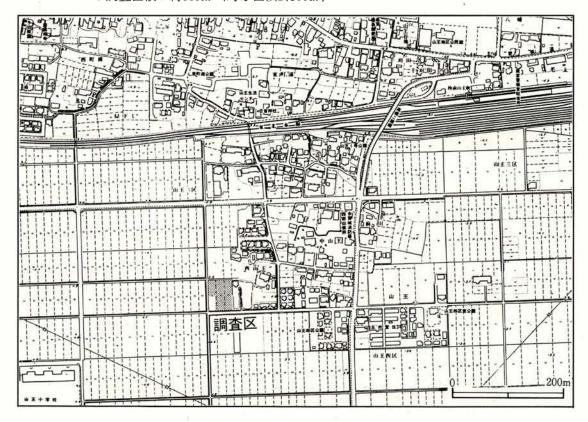
# IV 山王遺跡

## 1. 調查要項

〇所 在 地:多賀城市山王字山王二区179、179-1、180-1、181-1

O調査期間:昭和62年12年7日~15日

〇調査面積:約440m'(対象面積1,900m')



第1図 調査区位置図

# 2. 遺跡の立地

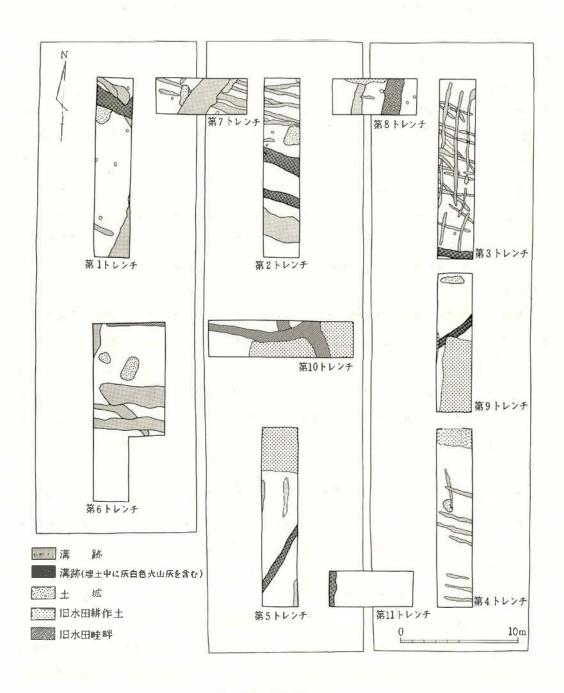
本遺跡は、古墳時代から近世にかけての大規模な集落跡であり、旧七北田川と砂押川によって形成された自然提防上に立地している。今回の調査区は遺跡のほぼ南端にあたり、JR東北本線陸前山王駅の南西約600mに位置する。現況は標高約4.4mの水田である。

# 3. 調査経過

本調査については、昭和62年9月に地権者より宅地造成工事の計画が提示されたため、それを受けて同年12月に試掘調査を実施したものである。過去の調査では、当該地の北東側と東側の隣接地において昭和55年と60年に発掘調査が実施され、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡や中世後半から近世初頭にかけての掘立柱建物跡、溝跡、土城などが検出されてい

る。したがって、当該地についても遺構が存在する可能性が十分考えられた。

調査は、はじめに3×15mの6本のトレンチを南北方向に設定して行った。その結果、表土下20~30cmの地山上で溝跡などの遺構を確認した。その後、遺構の延び方や分布状況をつかむため、新たに任意の大きさで5本のトレンチを設定して調査を継続した。



第2図 調査区平面図

### 4. 調查成果

調査区内の基本層位は、第 I 層暗灰黄色シルト(耕作土)、第 II 層黄灰色粘土質シルトである。後世の削平が著しく、調査区の大部分で地山面に直接第 I 層がのっている。第 II 層は耕地整理前の水田の耕作土で、調査区中央付近にその分布が限られる。

発見された遺構は、溝跡11条、土城8基、小溝跡、小柱穴跡のほか、耕地整理前の水田跡と それに伴なう畦畔跡である。遺構は調査区のほぼ全域で確認されたが、比較的北半部に集中す る傾向にある。すべて地山上での検出である。

まず溝跡について触れると、調査区北西部に位置する第1・6・7トレンチにおいて検出した南北方向に延びる溝跡は、一続きになるものと思われる。幅約1.2mを計り、北側で小溝跡や土城を切っている。埋土は、上層の耕作土に類似した灰色粘土質シルトである。他の溝跡については、埋土が褐灰色シルトのものと、黒褐色シルトのものとに分けられる。前者は、おもに調査区北半部で検出され、埋土中に10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰が含まれている。また、方向は一概にはいえないが、磁北に対して全体的に東側に偏する傾向にある。

土城については、埋土が黒褐色シルトのものと、黒褐色シルトが混入したにぶい黄褐色シルトのものとに分けられる。大きさ、形態とも一様ではないが、平面形は楕円形を呈するものが 比較的多い。

小溝跡は、調査区北東部と南東部にまとまりがみられるが、前者の方が圧倒的に分布密度が 濃い。幅は全体的に20~30cmとほぼ一定している。深さは非常に浅く、同一溝跡でも削平のため途切れる場合が多く、まとまりや重複関係がつかみづらい状況にある。埋土は、すべて地山に類似したにぶい黄褐色シルトである。また、方向にある程度規則性がみられ、磁北の南北軸にほぼ一致するものと、東西軸に対して東側でやや南に偏するものの2つに大別できる。前者については、第3トレンチで多くみられる程度であるが、重複関係から後者より新しいことがわかる。

遺物は、遺構の掘り込みを全く行っていないため、すべて堆積土出土のものである。第Ⅰ層 第Ⅱ層とも土師器、須恵器、赤焼き土器、中世陶器に、近世以降のものと思われる陶磁器や瓦 が混入している。また、小破片が多く図示できるものはない。

### 5. まとめ

今回の調査における発見遺構の構成は、溝跡、土拡が主体を占める。これらの遺構は、埋土中に灰白色火山灰を含むものが多いことなどから、平安時代を中心にするものと思われる。また、昭和60年に発掘調査を実施した東側隣接地においては、平安時代の遺構のほかに中世後半から近世初頭にかけての遺構が数多く発見されていることから、本調査区にも同様の遺構の広がりがみられる可能性が強い。

# 写 真 図 版

新田遺跡	(後地区)	F	68 · 69
新田遺跡	(西地区)		70 · 71
山干遺跡	.,		72~74

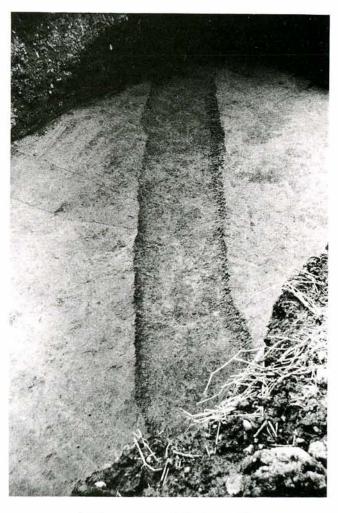
# 新田遺跡 (後地区)



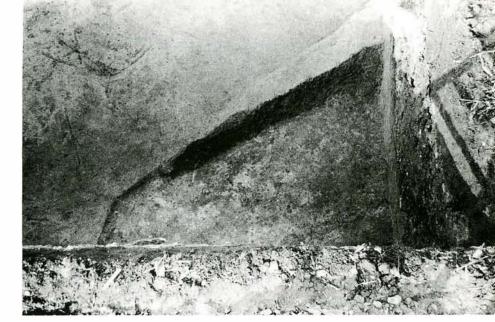
図版1 調査区全景



図版2 第1トレンチ遺構検出状況



図版3 溝3 (第1トレンチ)



図版 4 土城 1 (第1トレンチ)



図版 5 土 塩 2 埋土断面 (第 1 トレンチ)

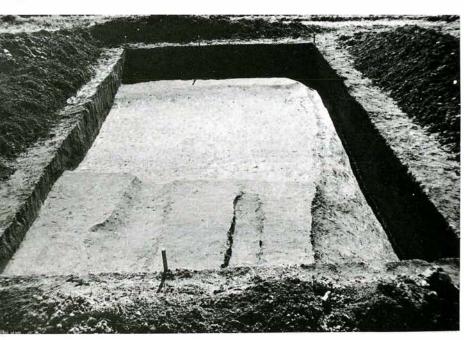


図版 6 溝 4 埋土断面 (第 6 トンンチ)



# 新田遺跡(西地区)

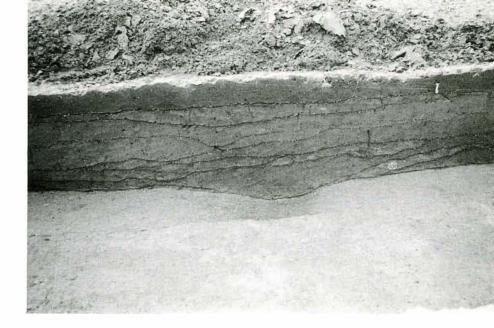
図版 1 調査区全景 (東側より)



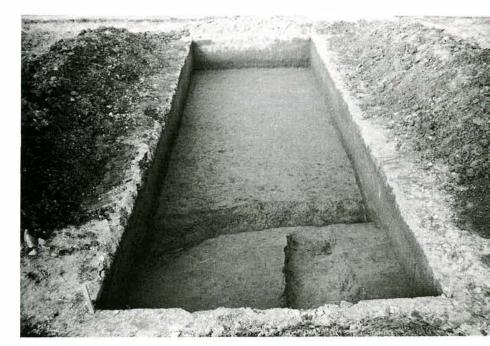
図版 2 第1トレンチ (北側より)



図版 3 第2トレンチ (南側より)



図版 4 第 2 トレンチ 土層堆積状況 (東側より)



図版5 第3トレンチ (衛側より)



図版6 第3トレンチ 土層堆積状況 (東側より)

# 山王遺跡



図版 「 調査区全景 (西側より)



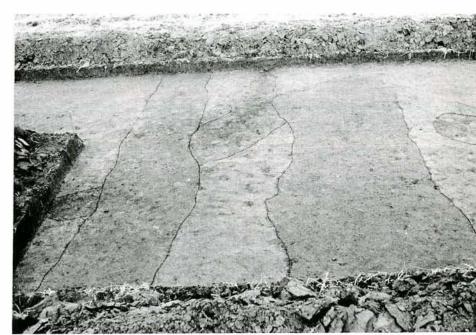
図版2 掘り込み状況 (南東側より)



図版3 掘り込み状況 (北西側より)



図版 4 第 2 トレンチ (南側より)



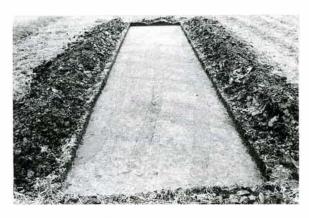
図版 5 第 6 トレンチ (東側より)



図版 6 第 7 トレンチ (東側より)



図版7 第1トレンチ(北側より)



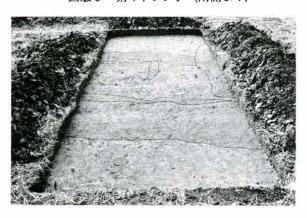
図版8 第3トレンチ(北側より)



図版9 第4トレンチ(南側より)



図版10 第5トレンチ(南側より)



図版11 第8トレンチ (東側より)



図版12 第9トレンチ(南側より)



図版13 第10トレンチ (西側より)



図版14 第11トレンチ(西側より)

## 多賀城市文化財調查報告書刊行目録

- 第1集 館前遺跡-昭和54年度発掘調査報告- (昭和55年3月)
- 第2集 山王·高崎遺跡発掘調査概報 (昭和56年3月)
- 第3集 高崎・市川橋遺跡調査報告書一昭和56年度発掘調査報告書一(昭和57年3月)
- 第4集 市川橋遺跡調査報告書-昭和57年発掘調査報告書- (昭和58年3月)
- 第5集 市川橋遺跡調査報告書一昭和58年発掘調査報告書一(昭和59年3月)
- 第6集 志引遺跡発掘調査報告書(昭和59年3月)
- 第7集 大代横穴古墳群発掘調査報告書(昭和60年3月)
- 第8集 市川橋遺跡-昭和59年度発掘調査報告書- (昭和60年3月)
- 第9集 山王遗跡-昭和60年度発掘調査報告書 I (昭和61年3月)
- 第10集 山王遺跡-昭和60年度発掘調査報告書Ⅱ- (昭和61年3月)
- 第11集 高崎遺跡-都市計画街路高崎大代線外1線建設工事関連発掘調査報告書 [一 (昭和61年3月)
- 第12集 高崎獎跡-都市計画街路高崎大代線外1線建設丁事関連発掘調査報告書Ⅱ-(昭和62年3月)
- 第13集 市川橋遺跡一昭和61年度発掘調査報告書一(昭和62年3月)
- 第14集 年報1 (昭和62年3月)
- 第15集 昭和62年度発掘調査報告書 (昭和63年3月)
- 第16集 年報2 (昭和63年3月)

#### 多賀城市文化財調査報告書第15集

### 昭和62年度発掘調查報告書

昭和63年3月31日 発行

編 集 多賀城市埋蔵文化財調査センター 発 行 多賀城市中央二丁目27番1号 電 話(022)368-0131~4

印刷渡 辺 印 刷 塩釜市旭町 17 番 13 号 電話 (022) 3 6 4 - 3 1 6 1